

加子母村の朝・昼・夜

—江戸時代の“かしも生活”⑤—

高木まどか



林政史ブックレット——尾張藩の林政と森林文化

11

加子母村の朝・昼・夜
——江戸時代の“かしも生活”⑤——

高木まどか

公益財団法人 徳川黎明会
徳川林政史研究所

はし が き

我が国は、国土の約三分の二が森林で占められている森林国である。これら森林は、木材をはじめとする林産物を供給するばかりではなく、水資源を蓄えたり土砂災害を防止したりする役割を担っている。さらに、近年は森林をレクリエーションの場として利用したり、森林の恵みを再認識する機会を設けたりするなど、我が国固有の「木」の文化を継承しながら、森林の新たな活用方法を見出そうとする試みもみられている。

このような森林の役割や文化の継承を考えると、森林と人びとが歩んできた歴史や、そのなかで人びとが営んできた暮らしの様相を明らかにすることは、私たちにとって重要な議論の素材を提供してくれるだろう。当研究所では、これら森林と人びとの歴史を明らかにすることを目的の一つとして、これまで全国各地の行政機関や史料保存機関、さらには山間地域の旧家に所蔵されている史料の整理・保存活動や、写真撮影による史料の収集を実施してきた。本シリーズではその成果として、平成三〇年（二〇一八）度より実施している内木哲朗氏所蔵文書の調査から明らかとなった江戸時代の森林管理のあり方や、地域に暮らす人びとの生活の様相について紹介していきたい。

内木家は江戸時代に尾張藩の「御山守」を代々務めてきた家で、日記をはじめとする三万点におよぶ史料が、今なお同家には残されている。シリーズ一一冊目となる本冊では、『加子母村の朝・昼・夜―江戸時代のくらしも生活⑤―』と題して、御山守内木彦七の日記から、江戸時代の時間感覚や山村における日常的な仕事、

さらには季節ごとにおこなわれる慣習などについて紹介する。時計などの機械で正確に時間を測ることが困難だった江戸時代、人びとはどのように時や季節を把握しながら日々を送っていたのか。また、そうした日々のなかで営まれる暮らしはどのようなものだったのか。本書を通じて、緩やかながらも刻々と変化する山村生活の実態を窺い知る機会となれば幸いである。

なお本シリーズの執筆は、当研究所の若手研究者や特任研究員をはじめ、これまで史料調査や教育普及活動にご協力いただいた研究者が中心となっている。末筆ながら執筆者各位とともに、調査等でいつも格別なご配慮を賜っている史料所蔵者の内木哲朗氏に感謝申し上げます。

令和七年三月

徳川林政史研究所

目次

はじめに	1
------	---

1 内木家の毎日

(1) 江戸時代の時間	6
(2) 夜明け前からはじまる一日	13
(3) 夜の楽しみと不安	22

2 季節を過ごす

(1) 「蚕やしなひ」に大忙し	33
(2) 生活の道具と習わし	39
(3) 奉公人の働き	48

3 変わっていく日常

(1) 彦七の隠居 60

(2) 「かゝ」から「ばゝ」へ 65

おわりに 80

参考文献 83

表紙 内木家の門を内側から臨む(撮影 萱場真仁)

挿紙 本間希代子

はじめに

月をみて迎える夜明け

江戸時代において、人びとはどんな風に朝を迎えていたのでしょうか。はじめにひとつ、明和六年（一七六九）のある朝の情景を、内木彦七という人の日記からみてみましょう。

雨止ミ、月夜ニ而夜明と相見へ起キ出、飯たかせ候処、夜明ケニ相成不申、未
明浅七二月額為剃申候、人足共ニも剃刀借シ渡し、皆々ニ為剃候処、夜明
ケ迄ニ皆々剃申也（明和六年一〇月二二日条）

旧暦一〇月二二日。この日、彦七は御山守の仕事のため、人足たちとともに三浦山を訪れていました。夜通し降っていた雨も止み、空に月が出ているのに気づいた彦七は、もうすぐ夜明けだと思い、いそいそと起き出しました。陰暦一六日以降は、夜が明けかけても空に月が残ります。これを「有明の月」などと呼びますが、彦七はそれをみて「もうすぐ夜明けだ」と考えたのです。

とはいえ、太陽に比べて月の動きは非常に複雑で、その傾きから時間を正確に測ることは困難です。彦七も予測を見誤ったようで、夜明けだからとご飯を炊いても

(1)
つきびたい。月代。前額部から頭頂部にかけて頭髮を剃り上げた部分。月代を剃り鬚を結うのが当時の一般的な成人男性の髪型だった。

らったものの、なかなか日は昇りません。少し待つとようやく空が明るくなってきたので、浅七に「月額⁽¹⁾」を剃ってもらい、さらに一緒に山に来ていた人足たちにも剃刀を渡してそれぞれ月代^{さかやき}を剃らせ、皆が終わったところでようやく夜明けを迎えたのでした。

結果的に早合点ではありましたが、「月をみて夜明けを知る」というのは、なかなか印象的です。時計のアラームで目を覚ますことの多い現代人からみれば、随分と風流ではないでしょうか。彦七にとっては「ありふれた一日のはじまり」だったのでしようが、現代に生きる私たちの日常とは随分と違ったことが、この記述からだけでもみえてきます。

本書では、こうした当時の生活模様を、「時間」や「季節」、「時の移り変わり」に注目しながらご紹介したいと思います。おもな素材とするのは、岐阜県中津川市^{かしも}の内木哲朗家^{てつろう}に残された、「御山方御用^{おやまかたごよう}并^{ならび}諸事日記^{しよじ}」という日記です。内木家は、加子母村の草分けとして庄屋を勤め、江戸中期の享保一五年（一七三〇）からは、尾張藩の「御山守^{おやまもり}」を勤めた家でした。日記を書いたのは、先程登場した彦七です。「彦七」というのは内木家の当主が代々襲名する通称のひとつで、日記の筆者である彦七は第一代当主、御山守としては二代目、諱^{いみな}（実名）は武久^{たけひさ}といいました。

(2)

彦七の家族や「一家中」についての詳細は、太田尚宏『林政史ブックレット 尾張藩の林政と森林文化』山村の人・家・つきあい―江戸時代の暮らしも生活①―(公益財団法人徳川黎明会 徳川林政史研究所、二〇二〇年)参照。

この第一代当主の彦七が御山守の仕事や日々の諸事を綴った「御山方御用并諸事日記」(以下、日記と記載)は、現在内木家に一〇冊残されています。一番古い日記は江戸中期の宝暦一三年(一七六三)のもので、つづいて明和二年(一七六五)・同四年・同五年・同六年・同八年・同九年(安永元年と改元)・安永二年(一七七三)・同三年・同四年と、やや飛び飛びながら、一〇年分の日記が残されています。彦七は非常に筆まめなひとで、家族のことはもちろん、周囲で起きたさまざまな事柄を詳細に書き残しています。そこからは、当時の何気ない毎日がありありと浮かび上がってくるのです。

本書ではこの魅力的な彦七の日記を紐解き、一章では内木家の朝から晩までを、第二章では季節を感じられる日々を、第三章では年歳を重ねることで変わっていく日常を追いかけていきたいと思います。およそ二五〇〜二六〇年前に加子母に生きた人びとの息遣いを、少しでも感じ取って頂ければ幸いです。

筆者・彦七をめぐる人びと

話をはじめる前に、彦七一家についてご紹介しておきましょう。^②

日記の著者である彦七は《桑原^{くわはら}》という屋号で呼ばれる家で、妻と長男夫婦と孫二人、次男(のち別家)・次女、そして一〜二名の年季奉公人と暮らしていました。

日記を書いていたところ、彦七は五〇歳代から六〇歳代前半ぐらいと推定されています。

彦七の妻は「か、」もしくは「ば、」と記されていて、残念ながら名前がわかりません。彦七の妻だけでなく、日記には誰かの妻が「清十郎内」や「徳次郎か、」といった形で記載されることが多く、女性の名前が明らかでないことは珍しくありません。

(3)
もともと古い日記（宝暦一三年）では二九歳、最後の日記（安永四年）では四一歳。二五歳のころに長男孫太郎をもうけている。なお、年齢は数え年（以下同）。

つぎに、彦七と「か、」の長男であり内木家の跡継ぎとなるのが善右衛門で、その妻おいくとの間には孫太郎・亀之助という二人の子がいました。つづいて次男は武助（武右衛門）、次女はおまつ（おみよ・おしげ）です。名前がいくつかあるのは、改名があったためです。当時の加子母のひとは何かの折に名前をかえていて、おまつのように複数回改名することもありました。

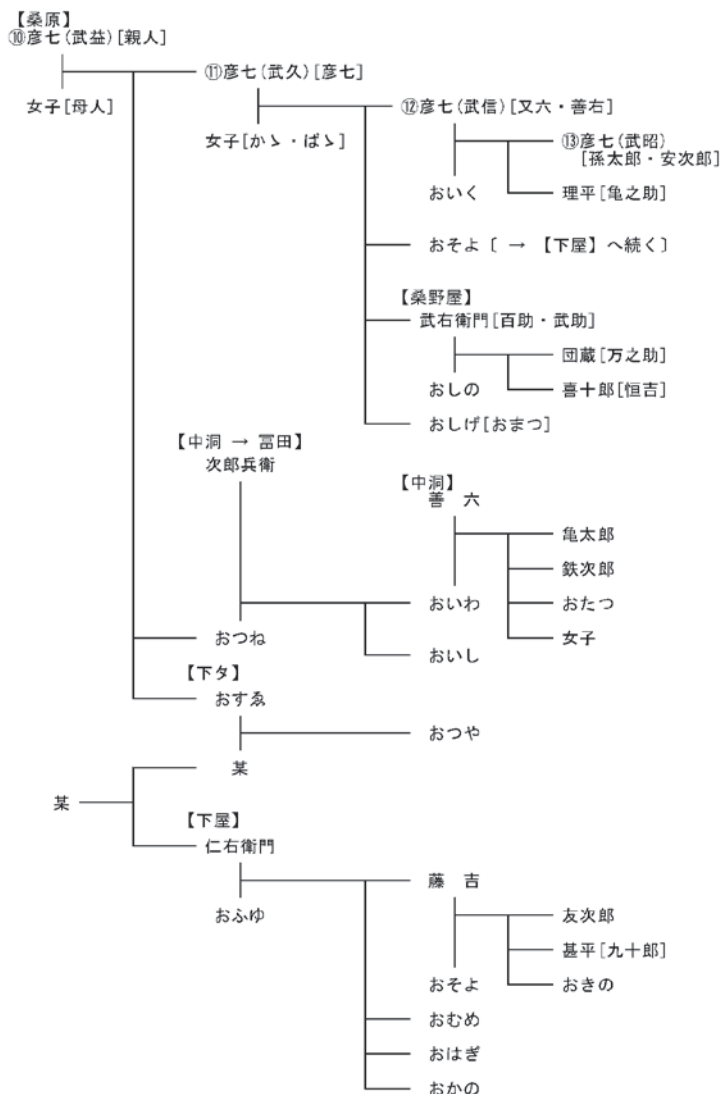
(4)
もともと古い日記（宝暦一三年）では二五歳、最後の日記（安永四年）では三七歳。

これが彦七と一緒に住む人びとですが、彦七の妹であるおつねと、おつねと同居している彦七の「母人」^{ははびと}（母親）、そしてお嫁にいった彦七の長女おそよと⁽¹⁾その夫藤吉などとも、日頃から親密な付き合いがありました。そうした家族同然につきあいのある親類・縁者を、彦七は「一家中」^{いっかちゅう}と記しています。

こうした彦七をめぐる人間関係を踏まえつつ、当時の加子母の日常を掘り起こしていきたいと思います。

図1 彦七の「一家中」推定系図

(太田尚宏『林政史ブックレット二 山村の人・家・つきあい—江戸時代の“かしも生活”①』〈徳川林政史研究所、2020年〉、22頁所収の図を引用)



註：名前は最終段階のもの。[] 内は、「御用留」「御山方御用并諸事日記」で記されたその他の名前・呼称である。

1 内木家の毎日

(1) 江戸時代の時間

今とは違う時間

もうすぐ夜が明けると思つて起き出したものの、存外早すぎて、しばらく夜明けを待っていた彦七。そんな朝の一場面を先にご紹介しましたが、「夜明ヶ」を待つ彦七の様子からは、一日の本格的なはじまりが日の出を迎えてからだだったということがうかがえます。当時の生活において「日の出」「日の入」が重要視されていたことは、江戸時代の時刻制度からもわかります。

(5) 正確には日の出・日の入前後の薄明の時間といれる。すなわち、日の出前に薄明が始まったころ〓明け六つ、日が沈み薄明が終わったころ〓暮れ六つ。

現代は一日二十四時間ですが、江戸時代は一日十二刻。ただし一日を十二で均等に割るのではなく、〈昼〉〓日の出から日の入まで、〈夜〉〓日の入から日の出までと定め、〈昼〉〈夜〉それぞれを六等分する「不定時法」が用いられていました。単純に一日を十二で割れば一刻〓二時間のはずですが、日の入と日の出を基準とするため、季節によつて一刻の長さには大きな違いがでてきます。たとえば日照時間の最も長いとされる夏至は〈昼〉の一刻〓約二時間四〇分、対して〈夜〉の一刻〓約一



図2 江戸時代の時刻(筆者作成)

時間二〇分と、八〇分も長さが異なります。冬はそれが逆転し、〈昼〉の一刻が短く、〈夜〉は長くなるわけです。

いまの私たちからみると、毎日少しずつ違う時刻というのは不便なようにも思います。しかし、いうまでもなく、当時と現代では「灯り」事情に大きな違いがありました。行灯や燭台、松明といった種々の照明はありましたが、現代のように煌々と辺りを照らしてくれる街灯や室内照明はありません。生活するにあたって自然光が不可欠な当時において、もっとも理にかなっていたのが不定時法だったのです。

時刻の数え方も現在とは異なり、十二支(子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥、あるいは九ツ・八ツ・七ツ・六ツ・五ツ・四ツで示しました。一刻は約二時間、昼夜で同じ呼び方をするので明六ツ・暮六ツなどといって区別する場合もありました。九ツから減っていく、一〜三ツは無いという、なんともわかりにくい数え方ですが、これはもともと『延喜式』に定められた平安時代以来の時報の打数に由来するのだといいます。現代のように機械時計が一般的でない時代、時刻は太鼓や鐘を打って人びとに知らされたのです。ちなみに、現代における一日の切り替わりは夜の「零時」ですが、江戸時代に

(6)
地域によっては日の入を基準とし「日が沈んだら次の日」というところもあったという。

おいては「零時」に該当する子の刻(こく)(九ツ)よりも、やはり日の出＝明け六ツ(卯の刻)が一日のはじまる基準として重視されました。⁽⁶⁾もつとも、彦七の日記ではおおむね「起きたところから今日」という書き方がなされており、体感としての一日の始まりは現代の私たちとさほど変わりはありませんように思います。

太鼓や鐘を打つ基準となった「時計」は、さまざまな種類が存在しました。たとえば、江戸城の土主(とけい)の間(ま)で管理されていた櫓時計(やぐら)は、ヨーロッパから伝わった機械時計を不定時法に合わせるべく工夫された和時計です。不定時法に合うというのは、すなわち時間を刻む速さが一定でないということであり、その管理・調整には相当な手間がかかったといえます。こうした和時計は到底庶民には手が届かず、寺院でも線香や抹香の燃焼時間を単位として時間を測る「香時計」を基準とし、鐘を打つところが少なくありませんでした。

据置き時計ですらこうですから、懷中時計や腕時計といった小型の機械時計の普及は、近代を待たねばなりませんでした。しかし、機械式でなければ、持ち運べる時計はありませんでした。それが、太陽の光によって時を知る「日時計」です。日時計は有史以前から存在し、はじめは地面に石を円状に並べて、その石の影の位置で時間を判断する仕掛けでした。環状列石(かんじょうれつせき)(ストーン・サークル)などと呼ばれるこの日時計は当然持ち運べませんが、江戸後期になると紙製の日時計が広まります。季節

(7)

明和五年、正月一五日条。

(8)

明和八年、三月一日条。

(9)

宝暦一三年、四月八日条。

に合わせた札を垂直に立て、その影の長さによって時間を知るのです。折りたたんで持ち運べば、時の鐘が聞こえない場所でも簡単に時を知ることができるようにしました。

日記にみられる時間

さて、以上が江戸時代の時間をめぐる概要ですが、彦七の日記で「時間」はどのように書かれているのでしょうか。

非常に筆まめな彦七は、日々の出来事を記す際、「おつねも四ツ比よっころ(二〇時頃)分より手て伝でひいニ来きたりたま給さうろう候う」⁽⁷⁾「九ツ時比どきじろ(二時頃)清せい十来じゅうきたる」⁽⁸⁾という風に、時刻を書き添えています。したがって彦七には時間を知る術があったのでしようが、それが何なのかは残念ながらわかりません。加子母では永養寺という寺(字井尻。明治期に廃寺)に梵鐘ぼんしょうがあったといえます。内木家のすぐ近くには法禅寺というお寺もありましたから、そうした近隣の寺の鐘の音を頼りにしていたのかもしれない。また、彦七は登山中も「七ツ前頃みなまへころ小屋着やちやく」⁽⁹⁾などと日記に記しており、寺の鐘が届かないであろう場所でも時刻がわかっていいる様子がみられます。携帯できる日時計を持っていたか、あるいは太陽の高さなどで推測していたのでしょうか。

こうした時刻に関する日記の記述を追いかけると、ひとつ面白いことがみえてき

ます。先述のとおり彦七は時刻を細かく記していますが、ほとんど日記に登場しない時刻があるのです。それは「六ツ」。すなわち、日の入もしくは日の出の基準とされる刻限（六時ごろ）です。

当時においては日の出・日の入が重視されていた筈なのに、なぜ「六ツ」はほとんど登場しないのでしょうか。この疑問を解くためにさらに日記を紐解くと、どうやら彦七は日の出・日の入前後の時間帯を別の呼称で表しているらしいことがわかってきます。

一番鶏（鶏鳴）、二番鶏、未明、夜明、日出

日はづり（日外）、夕方、日入、暮合、暮、暮々

(10)

明和四年、正月一七日条。

右は日記に登場する、「六ツ」前後の時間をあらわす言葉です。これらに「前」や「過」が付属して「鶏鳴前」「暮過」などと記されたり、「此朝遅々善右帰ル」というふうに「遅々」をつけ、その時間帯のなかでも遅いことが示されている場合もあります。

(11)

明和九年、正月二日条。

今の私たちからみるとどれも似たような言葉にみえますが、彦七は「夕方より暮合迄おそよ・お市・おいわ年礼ニ来ル」などと書き分けており、明確な区別があったことが見て取れます。ただ、これらの言葉は表す時刻の正確な違いがわからないものがほとんどです。右の並びは分かる範囲で時間順に並べたものですが、彦

(12)
安永三年、四月八日条。

(13)
明和八年、九月二九日条。

七は日記を思い出すままに書いていることも多く、確証のないものもあります。

時刻の呼び名をいくつか取り上げてみてみましょう。あまり耳馴染みのない「日はづり」(日外)は、『日本国語大辞典』によれば岐阜県飛騨で「日没」を意味したとあります。ただし「日入」も同様に「日没」を意味しますから、その正確な違いはよくわかりません。「日はづり」の後に記されていることが多いのは、「夕方」や「暮」「暮合」です。彦七はいちおう「夕方」「暮合」「暮」という順番で書いているようですが、現代であれば「夕方」でひとまとめにされるこの時間帯を、いかに区別していたのかは、やはりはっきりしないところです。

時刻の呼び方については不明な点も多いですが、こうしたことを踏まえれば、彦七が「六ツ」をほとんど使わなかった理由がみえてきます。すなわち、刻一刻と空の明るさが変わる日の出・日の入前後の時間は「六ツ」では表しきれず、微妙な時間の差を示せる「日はづり」「暮合」といった慣習的な名称の方が、より生活に則した言葉だったということでしょう。

わずかながらも「六ツ」という記述が登場するのは、面白いことに、村や山を訪れた役人の到着・出発時刻を表す場合がほとんどです(宗門奉行も今朝六ツ時加子母着)。(組頭善十郎が)明朝六ツ時御立之筈(など)。公的には「六ツ」という言葉を用い、慣習的な時刻と区別していたわけです。ちなみに十二支を使う場合も同様

表 「六ツ」前後の時刻の名称とその並び

鶏鳴→夜明	鶏明前々椿剝也、此節貞四郎も手伝ニ来呉候、 <u>夜明</u> ヶウ善助も来ル	明和4/10/27
	鶏明前々起キ候而支度致ス也、したや・中洞へ勘兵衛起シニ相越、岩屋へハ文吉遣ス、追々清十・おそよ・おいわ・文吉来り、 <u>夜明</u> ヶ彦七夫婦・おかね・武助・勘兵衛・佐助・清十・おそよ・おいわ・孫太郎、供文吉・幸次郎都合拾式人出立	明和5/1/22
未明→夜明	天氣能未明より致支度候処、 <u>夜明</u> ヶ候而善六来り	明和4/1/29
	<u>未明</u> の強降、 <u>夜明</u> 暫止ミ居申候而又々降	安永3/6/17
夜明→日出	<u>夜明</u> ヶ庄屋清九郎出立、舟場へ相越候処、舟積遅ク暫待合居申候処、 <u>日ノ出</u> ニ相成也	宝暦13/12/7
	<u>夜明</u> ヶ前々雨降也、 <u>日出</u> 頃の天氣様子能相成ル	明和2/6/17
日はづり→夕方	<u>日はづり</u> 組頭儀左衛門有本村ヶ之証文持来り、受取、夫ヶ儀左衛門帰ル、尤右証文重而御戻し被下候様被仰達被下候様、庄屋申越候旨儀左衛門申聞候付、兼而此方も其心得ニ而達書ニ相認候旨申渡候、 <u>夕方</u> 七里勘助来候付、達書壱通、人数書壱通、斧形壱枚、村方願書壱通、越原村証文壱通、都合五通壱封ニして板挟急宿次申下刻といたし、右勘助ニ相渡、付知へ為持遣ス也	明和5/11/30
夕方→日入	<u>夕方</u> 出シ雲ニ相成、 <u>日入</u> 前晴ル也	安永2/9/21
	夫ヶ拾三番杭へ戻り、是より奥へ丁場申付候、 <u>夕方</u> 辰次郎飯たきニ遣ス、 <u>日入</u> 迄ニ拾三番杭が七八拾間程奥迄出来、夫ヶ召つれ帰ル	明和2/8/5
日入→暮	<u>日入</u> 候而ミタへ母人御目ニ懸り相越ス、次郎兵衛入麵出ス、然処へ暮前仁右衛門来ル	宝暦13/7/26
	白草ニ而 <u>日入</u> 及 <u>暮</u> 小屋着	明和8/10/16
夕方→暮合	<u>夕方</u> より暮合迄おそよ・お市・おいわ年礼ニ来ル	明和9/1/2
	<u>夕方</u> 雨無小止降、右之儀ニ付、勘兵衛とミだ江相越ス也、暮合同人帰ル	宝暦13/2/22
暮合→暮	<u>暮合</u> 善右婦、小四郎・李八付添来ル、残りハ及 <u>暮</u> 帰ル也	明和4/6/22
	調印差出候様申渡遣シ候処、 <u>暮合</u> 調印持参ニ付及暮候間	明和4/10/27
暮→暮々→夜	<u>暮</u> 前おいくハ夕飯拵ニ帰ル、残りハ <u>暮々</u> 植仕舞候由ニ而、夜ニ入帰ル也	安永3/5/10

※「鶏鳴」と「未明」については時系列がわかる記載がみられないが、鶏鳴は「此夜鶏明前武助ヶ久米藏来ル」(明和8/12/20)、「此夜鶏鳴之比」(安永2/6/4)と夜の出来事として書かれていることもみられ、未明より早い時間帯を指したと考えられる。

※※「日入」と「暮合」について、時系列不明。

(14)
申は四時ごろ。上中下刻は
一時の三分。

で、役人とのやりとりでは書簡に「申ノ上刻」などさるのじようこくと刻付するなど、普段は曆上などでしか使っていない十二支で時間を記している様子がみられます。

日が昇って沈むという毎日は、現代の私たちと変わらないはずです。しかしその捉え方が思いのほか異なっていたことが、種々の時刻の呼称や、その使い方からはみえてきます。

(2) 夜明け前からはじまる一日

朝飯前のひと働き

ここからは、内木家の一日の様子を朝・昼・晩と追いかけてみましょう。

とある夏の日の日記には、こんな朝の情景が記されています。

武助たけすけ・幸次郎こうじろう、牛足切うしあしきりニ朝飯あさめしまへ相越えあひこすなり也(明和二年八月一二日条)

武助(彦七次男)と奉公人の幸次郎が「朝飯まへ」(朝飯前)から「牛足切」に行った、という記述です。「牛足切」とは穏やかではありませんが、これはおそらく「削蹄さくてい」のことでしょう。運動量の少ない牛は蹄ひづめが伸びたり変形してしまうため、定期的な削蹄が必要でした。なかなか技術のいる大変な作業のようですが、そうした仕事を朝飯前にこなしているわけです。

内木家の朝は早く、夜明けごろから種々の仕事にとりかかりました。たとえば

(15) 明和四年、五月二日条。

(16) 安永二年、四月二九日条。

(17) 田に水を引くこと。もしくは、水を汲み上げること。

(18) 耕作しやすくするため田を掘り返すこと。

(19) 安永三年、五月一三日条。

(20) 宝暦一三年、八月一日条。

(21) 宝暦一三年、正月二〇日条。

(22) 明和九年、三月二一日条。

「夜明^{よあ}ケ子共^{こども}柴刈^{しばかり}ニ出ル^で」とか、「鶏鳴^{けいめい}今^{いま}徳助^{とくすけ}水^{みづ}あてニ出ル^で也^{なり}」と、子どもや奉公人

が芝刈りや「水^{みづ}あて」に日が出る前から精を出しています。朝から他所の人に「田

打ち^{うち}」を手伝ってもらい、ご飯^{ごはん}をご馳走することなどもありました。⁽¹⁹⁾ 早朝の来客

は珍しくなく、あるときは近隣の清十郎が朝からやって来て「小判^{こばん}壱両^{いちりょう}」を貸して

くれというので貸したうえ、朝ご飯まで振る舞ってあげています。⁽²⁰⁾ 内木家の人が朝

から他家にお邪魔することもあり、「多^{おほ}ひす講^{こう}」(恵比寿講)のお祝いで「夜明^{よあ}ケ」か

ら「か、」と善右衛門が隣の《岩屋》を訪れていたり、「お茶を振る舞いたいの⁽²¹⁾で、

朝飯前⁽²²⁾に来てください」とお願いされていることも。現代では朝の訪問は避けが

ちですが、当時の加子母ではどうやら普通のことであったようです。

ご飯の支度

さて、朝飯前という言葉がたびたび登場しましたが、内木家では一日三食にくわえ、たまに小昼飯^{こちゅうはん}(三食以外の軽い食事)をとっている様子がみられます。彦七は普段の食事にはあまり関心を払っていないのか、食事の記述自体はそれほど多くありません。とくに夕飯にくらべて朝飯・昼飯の記述は少ないですが、特別な日のメニューや、好物、珍しい食べ物については細かく記述していて、「食」を楽しんでいたことがうかがえます。

(23)
春から数えて八十八日目に
あたる、農事の節目の日。

(24)
明和九年、二月二〇日条。

(25)
明和五年、七月二五日条。

「ご飯の支度は、基本的にはおいしく(彦七の長男善右衛門の妻)の役割でした。たとえば「此朝^{このあさ}おい^{あさめし}く朝飯^{あさめし}ニ温飩^{うどん}打^{うち}、皆々^{みなみな}給^{たま}申^{もうす}也^{なり}」(安永三年五月一日条)と、朝からおい^{このあさ}くが温飩を作ってくれたことが書かれています。温飩は特別な日に食べることが多く、この日は八十八夜⁽²³⁾のお祝いでした。

おい^{このあさ}くが体調不良の日は、かわりにおまつ(彦七次女)が支度をすることもあり⁽²⁴⁾ました。加えて、男性陣——善右衛門(彦七長男)や武助(次男)が折につけ腕を振るうことも。「善^{ぜん}右^う此^{このあさ}朝^{あさ}薯^し蕷^{やう}汁^{じゆ}拵^{こしらえ}、皆々^{みなみな}ニ為^{くわ}喰^せ申^{もうす}也^{なり}」(24)「夕飯^{ゆうはん}ニ善^{ぜん}右^う・武助^{たけすけ}温飩^{うどん}拵^{こしらえ}申^{もうす}也^{なり}」(25)などと薯蕷汁や温飩を作っているほか、武助を呼び出して善右衛門が鳥汁を振る舞い、その日の夜に武助が温飩を拵えている日などもあります。

あるときには、四ツ前頃(二〇時前ごろ)に長女のおそよが内木家に立ち寄り、おい^{このあさ}く^{このあさ}にこんなことを言いました。

昼^{ひる}支^じ度^{たく}之^の節^{せつ}ハ藤^{とう}吉^{きち}温飩^{うどん}拵^{こしらえ}持^{もち}持^{もち}参^{まゐ}申^{もうす}咎^{とが}二^に候^{こう}間^ま、其^{その}心^{こころ}得^えを以^{もつて}昼^{ひる}支^じ度^{たく}之^の用^{よう}意^いニ^{およぼす}
不^{およぼす}及^{およぼす}(明和八年七月七日条)

藤吉、すなわちおそよの夫が昼に温飩をもってくるから、おい^{このあさ}くは支度をしないでもよいという話です。約束通り昼ごろにやってきた藤吉は持参の温飩を茹で、皆に「夥^{おびただしい}」ほど振る舞ったといえます。この日は七月七日、七夕の節句です。特別な日にはこうして親しい人がご馳走をもってきてくれたり、お呼ばれすることも

あったので、おいくは心置きなく炊事を休むことができました。

洗濯物を「こしらえる」

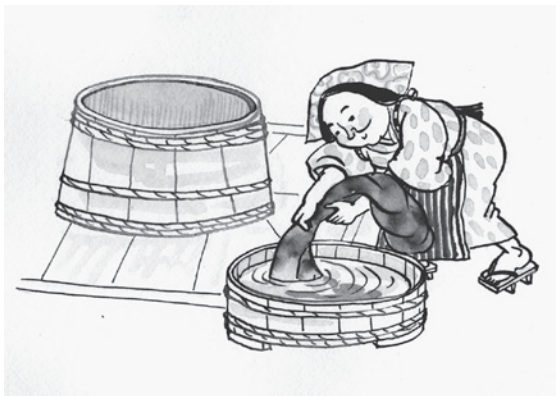
日々の大事な仕事といえば、炊事にならんで洗濯もありました。「此朝久藏ハ洗濯たくつかわすニ遣(26)」と朝から奉公人に洗濯をさせる様子もみられますが、「四ツ頃（一〇時ごろ）」「昼過」に洗濯という記述がより多く、お昼前後から取り掛かるものだったようです。

(26)
安永三年、一〇月二十九日条。

(27)
明和九年、一二月二〇日条。
を使つて洗つたと思われる一方、「暮合徳助くれあいとくすけ洗濯せんたく分よりかゝる帰(27)」といった記述もみられ、近隣の川などにも行つていたのかもしれませんが。

炊事はもっぱらおいくの仕事でしたが、洗濯物はそうではなかったようです。おいくやおまつも洗濯はしていますが、より記述が多いのは、内木家の奉公人や、彦七の姉妹であるおすゑ・おつねです。「此日このひおすへたのミ洗濯せんたく」(28)といった風に、お願いして洗濯に来てもらつています。こうして人に手伝ってもらふのはもちろ

(28)
宝暦一三年、四月三日条。



(29)
明和六年、一〇月一二日条。

ん、他人の洗濯物を頼まれることもありました。縁者の今井勘兵衛が木曾から帰ってきた際には、「一先洗濯之願^{ひとまずせんたくのねがひ}二而引取候由^{ひきとりてうけうよし}」と、仕事の報告かたがた洗濯のお願いをされ、それを快諾しています。

すべて自分の手でおこなう洗濯が、いまよりずっと手間のかかるものであったことは想像に難くありません。とりわけ着物の洗濯は一苦勞で、わざわざ継ぎ目をほどこいて洗い、糊をつけ板に張ったりして、皺^{しわ}を伸ばし乾かすという「洗い張り^{あらば}」がおこなわれていました。洗濯物が乾いた後、これらを元通りに縫い合わせ、モノによつては綿を入れ直すまでが洗濯の工程だったのです。

(30)
安永三年、一〇月一日条。

洗濯物を縫い合わせたり、綿を入れ直すことを、彦七は大抵「拵^{こしらえ}」と表現しています。「おしけ昨日^{きのう}夕洗濯物^{せんたくもの}拵^{こしらえ}申也^{もうすなり}」などとあり、継ぎ合わせるのにはなかなか時間がかかったようです。彦七の母や、姉妹であるおつねとおすゑは針仕事が得意だったらしく、一か月に二回ほどやってきて洗濯物を拵えてくれているときも



(31)
明和五年、一二月四日条。

あります。おすゑやおつねに羽織の仕立を頼んでいることもあるので、相当な腕の持ち主だったのでしょう。

こうしてみると、洗濯の拵えはまさに「女性」の仕事ですが、なかでも「年配の女性」がその役割を担っていたように思われます。まだ年若いおまつやおいくは「林より木端背負申也」⁽³¹⁾などと力仕事をしている様子がしばしばみられ、針仕事よりそうした役割が優先されたのでしょう。男性が炊事をすることもあったように、個々人ができること・得意とすることをして、一家中が助け合い生活を送っていたことがうかがえます。

嫁・舅事件

それにしても、いまならば蛇口を捻れば出てくる水を朝から汲みにいったり、洗濯物をいちいち解いて縫い合わせたり——現代の便利な生活に慣れきっている私たちからみると、何につけても手間のかかる日々を過ごしていて、昔の人はなんて勤勉で忍耐強かったのだろうと感心してしまいます。

しかし、当時の人も、そうした日々の仕事を億劫に思う気持ちはあったようです。彦七の長男善右衛門の妻であるおいくは、あるとき無精がたたってか、家を追い出されそうになってしまいました。

此日も陰り、寒シく、お幾事昨日一日休ミ居申候処、此朝も起キ不申善右
 起シ候処、却而過言等申ニ付、余り不届成儀、仍而善右子共とも罷出
 候様、片時も差置申儀難成旨善右ニ申付候(明和四年二月六日条)

おいくが昨日一日中休んでいたと思つたら、この朝も起きてこず、夫の善右衛門
 が起こしにいったところ、おいくはかえつて「過言」をいう始末だったといいま
 す。過言とは、相手に失礼になるような言葉や悪口です。ようするに、無理に起こ
 されたおいくが、善右衛門になにか悪態をついたのでしょう。夫婦どうしならよく
 ある些細な諍いのように思えますが、それを聞いた彦七は「おいくの態度はあまり
 にもけしからん」と怒つてしまいます。そして、「もはや片時も家に置くことはで
 きない。おいくはもちろん、善右衛門と子どもも一緒に出ていきなさい」と言い渡
 してしまつたのです。

こうした部分だけを切り取ると、「おいくが起きられなかったのは体調不良で、
 舅の彦七が嫁イビリをしていたのでは」と想像する方もいるかもしれませんが。こ
 の騒動が起きたのは一二月で、現代でいえば一月の下旬ごろ。山深い加子母の寒さ
 は厳しく、身体がついていけないとしても無理はないでしょう。

ただ、日記を読んでいる限り、彦七は気難しそうなところはあるものの、理不尽
 に家族を怒るような人にはみえません。少し後の話になりますが、彦七が山守とし

て登山中、家に残してきた「ば、」・おそよ・おいくの体調不良を書簡で知り、その後の様子を人足の貞吉にわざわざ聞いてきてもらったことがあります。⁽³²⁾ 皆がよくなったと聞いて喜んだ彦七ですが、実はこのころ、彦七の方こそ体調に不安を抱えており、この後急な下山をせざるを得ないほどでした。彦七は亡くなる直前まで家族の怪我や病気を心配しており、自分が苦しくても家族を思いやれるひととなりか垣間見られます。

そうした彦七の気質に加え、突然長男一家を追いつき出そうとするほど怒るというのも妙ですから、彦七としては前々から何かおいくに思うところがあつたのでしよう。実際、騒ぎを聞いてとりなしにやってきた友人の清十郎と妹おつねの夫次郎兵衛に対して、彦七は「只今迄ハ随分勘弁いたし来候へ共、此上ハ堪忍相成不申候。」⁽³³⁾（今まで随分と許してきたけれど、これ以上許すことはできない）と話しています。この日より前の日記においくへの不満はみられませんが、小さなことが積み重なっていたのかもしれません。

さて、彦七は清十郎や次郎兵衛の説得を突っぱねましたが、その後も妹のおつね、長女のおそよ、姪の夫善六と、一家中の人びとが次々ととりなしにやってきます。それでも彦七は頑なに前言撤回をせず、そのうえ揉めている最中に迷惑な来客もあり、ますます頭に血がのぼってしまいます。しかし、清十郎・次郎兵衛・善六

はそんな彦七に負けじと食い下がり、夜が更けても帰らず、「おいくを許して欲
なければ明日までも居座る」という姿勢をみせました。

そんな三人の熱心さに、彦七もようやく落ち着きを取り戻したのでしょうか。

「そこまでいつてくださるのであれば、まずは当分おいくを許しましょう」と、よ
うやく譲歩してみせたのでした。それから彦七は三人に対し、酒にくわえて、粥ま
で振る舞っています。粥は今と同じく病人食などであるとともに、ハレの日の食事
でもありました。日記を見る限り客人に粥を振る舞っていることは減多にありませ
んから、彦七としては三人に特別な感謝を伝えたかったのかもしれませんが、渦中の
おいくは彦七の母と妹のいる家《富田》^{とみだ}へ身を寄せていましたが、さっそく次郎兵
衛・善六・おそよが迎えに行ってくれました。

話が済んだのは、もう夜も「遅々」です。こんなに大変なことがあった日ですか
ら、すぐに床についてもよさそうなのですが、彦七はその後、善右衛門に月代を
剃ってもらっています。身だしなみを整えて、苛立っていた気持ちをすっきりさせ
たかったのでしょうか。あるいは今回のことで、善右衛門とゆっくり話がしたかつ
たのかもしれませんが。月代を剃ってもらいながら、親子の間でどんな会話がなされ
たのでしょうか。

おいくを「当分」許すと譲歩した彦七ですが、この日以降これといった騒ぎはみ

られません。ここに勃発した嫁・舅問題は、なんとかおさまりをみせたようです。

(3) 夜の樂しみと不安

お風呂事情

(33)
荷は肩に一度に担えるだけの量。

(34)

安永三年、正月八日条。

ま泊まったといいます。⁽³⁴⁾
正月のある日、奉公人の徳助は昼から糶屋という家の向かいを訪れました。このあたりには湯(温泉)が湧いていたようで、これを三荷汲み⁽³³⁾、内木家に運びます。夜になってからこの湯を焚き、彦七と妻の「か」、「ば」、「おしげは「水風呂」を樂しました。彦七ら以外の家人六人は《下屋^{したや}》へ行って湯に入り、孫たちはそのまま泊まったといいます。

内木家のひとたちが「水風呂」を樂しみ、ほっと一息つく様子が目に浮かぶ記述です。「水風呂」は「みずぶろ」と読んでしまいそうになりますが、ここでは「すいふろ」が正しい読みです。水を沸かしたお風呂——すなわち今の私たちが想像する「お風呂」を意味します。なぜわざわざ「水」をつけるかというと、古くは水を張らない蒸気を室内に籠もらせた「蒸し風呂」が一般的だったからだとか、「据^{すえ}風呂」から変化した言葉だからなどといわれています。

このエピソードのなかでとくに興味深いのは、内木家でお風呂を沸かしている一方、《下屋》にもお風呂をもらいにいつているという点です。当時こうした「もら

(35)

明和八年、一月六日条。

(36)

明和二年、正月二五日条。

(37)

明和五年、七月一四日条。

(38)

明和八年、三月一〇日条。

い湯」は珍しくなかったようで、日記には「此夜おつね母子・おそよ・おふゆ入湯（35）ニ来ル也」。「此夜清十・次郎兵衛、湯入ニ来ル也」。「富田夕暮前三人共入湯（36）ニ来ル也」。「此夜藤吉・おつね母子・おそよ・おか（藤吉妹）も水風呂尋来ル也」など、暮前ごろから夜にかけて一家中の人びとが次々と内木家のお風呂に入り来ている様子が書かれています。あまり記述がないときもありますが、多いときは二三日に一回位のペースです。ただし誰も彼もが来ているわけではなく、彦七の妹おつね・次郎兵衛夫婦とその娘たち《富田》《中洞》、藤吉とその父仁右衛門《下屋》、彦七次男の武助《桑野屋》あたりがとりわけ足繁く通ってくる人たちでした。また、よく訪れる家であっても夫婦でやってくることはあまりなく、一人でくるか子どもを伴ってくる場合がほとんどです。

もらい湯は日々何気なくおこなわれていたようですが、張り切って客人を迎えることもありました。それは、彦七の「母人」(母親)がやってくるときです。

此日母人も御越、水風呂はやくたき候而、母人御迎三相越、御入湯、御帰（37）なり也(明和二年四月一四日条)

この日は母人が内木家に来るということで、彦七は水風呂を早くから焚かせました。そうして母人を《富田》へ迎えにいき、お風呂を楽しんでもらったのでした。内木家ではこうして早焚きのお風呂を楽しむことが稀にあり、あるときは善右衛門

が樫^{さわら}の皮を煎じていれてくれたからと、「日中」から焚かせて皆で入湯しています。樫は香りがさわやかで殺菌作用のある木ですが、何か他にも効能があったのでしょうか。腰の痛みには「忍冬^{すいかずら}・せきせう^石・桑わか木^唐」を煎じて水風呂に入れるのが良いといった記事もみられ、入浴剤を入れるように、効能や香りを工夫していたことがうかがえます。

(39) 年の瀬に母人にお風呂に入ってもらうことも、彦七の楽しみのひとつです。明和四年の大晦日には「毎年^{まいとし}之^の通水風呂桶^{とおすいふろ}持^も持^も行^{おけもちゆき}、母人江^は御入湯被^は成^{びとへ}候^{にゅうとうなられ}様^{そうろう}いたし候^{よう}様次郎兵衛^{ようじろべえ}ニ申渡^{もうしわた}置帰^{しおきかえ}ル⁽³⁹⁾」とあり、母人にお風呂にはいつてもらうため、例年大晦

明和四年、一二月二九日
条。江戸時代は太陰太陽暦
を用い、一か月を二九日ま
たは三〇日としていた。

(40) 箍。竹などを裂いて編み、
輪に作ったもの。桶や樽な
どの外側を堅く締めるため
に用いる。

田⁽⁴⁰⁾には水風呂桶がなかったようで、『富田』のひとたちがよくもらい湯にきていたのはそのためだったのでしよう。水風呂桶を貸し借りする例はままあり、長期登山中にお風呂にはいるためにどこかの家から桶を担いできたり、内木家でも桶の「たが」が外れてしまった際に『中洞』から借りてきたことが書かれています。結局この年は母人を内木家に迎えることとなり、長男の善右衛門が迎えにいつて、入湯を楽しんでもらいました。母人と一緒に新年を迎えることができた彦七は、「目出^{めで}

度く」と喜びをあらわにしています。

水風呂桶や風呂釜（焚口の部分）は、なにかとメンテナンスが必要でした。先述のように「たが」が切れたくらいであれば桶屋がすぐに直してくれますが、明和九年二月には桶が腐つてきていることがわかります。その後もだましだまし使っていたようですが、九月には桶も釜も「大破」し、別のものを探す必要に迫られました。彦七は杣頭の脇坂利左衛門に事情を話し「水風呂桶・釜共壺ツ分」を金一分で取り寄せてもらうことにします。一月一日にようやく桶・釜を受け取って、一八日には万賀の桶屋新八に桶の「取立」をお願いしました。桶には水が漏れた跡があり、整え直す必要はあったようですが、約二か月たってようやく内木家にお風呂のある日常が戻ってきたのです。

月代をさっぱりと

他所のお風呂を借りるもらい湯は、お風呂に入って汗を流し、内木家の人びと世間話に興じる憩いのひとときだったでしょう。それに加えて、男性には他のお目当てもありました。それは、月代を剃ることです。

此夜次郎兵衛入湯ながら月額剃二来り、同人二月額為剃申候（明和二年五月

二〇日条）

五月のある夜、《富田》の次郎兵衛がお風呂を借りるついでに「月額」(月代)を剃りに来て、彦七も次郎兵衛に剃ってもらっています。

(41)
安永三年、九月一四日条。

(42)
宝暦一三年、七月二五日条。木曾材木方飯田幸右衛門と御勘定方立合の山本惣右衛門。

(43)
加子母村小郷の今井勘兵衛。今井家は、彦七の妻か、の実家と推測される家。宝暦一三年三月一六日条。

(44)
宝暦一三年、八月二一日条。

(45)
明和四年、閏九月二六日条。

月代は前額部の部分の名称で、当時の成人男性は鬘を結うにあたりこの部分を剃るものでした。現代でいえばヒゲを剃るといった身だしなみと同様ですが、ヒゲとは違い誰かに剃ってもらわねばなりません。「善右、おしけニ髪月代為致申也」と、稀に女性が剃っている様子もみられますが、次郎兵衛と彦七がそうであったように、大抵は男性にお願いしています。妻や娘に剃ってもらったほうが楽なように思いますが、手慣れない女性では怖かったのでしょうか。登山中には「夕方飯田公月代、山本公髪結給り候」と山役人にもお世話になっていて、気安い間柄かどうか問わずにお願いしている様子も見取れます。

彦七はいつ・誰に月代を剃ってもらったのかを、日記に細かく書き残しています。そうした記述を紐解くと、剃る時間は夜ばかりではなかったようで(此朝勘兵衛呼越、髪月代為致「昼過源三郎ニ髪月代為致申也」)、御山守の仕事で出かける前に急いで剃ってもらっていることも。大抵の場合、三日〜七日以内には一度月代を剃っていますが、なかなか剃るタイミングがない登山中などは一四日ほど空いたり、甚だしくは一か月ほど剃らないときもあったようです。

あるとき彦七は、内木家を訪れた《野》の源六に「余り長髪ニ相見候」とても髪

(46)
詳細は前掲太田ブックレット。

(47)
林由紀子『近世服忌令の研究』清文堂、一九九八年。

が長くみえる」といわれ、その場で源六に月代を剃ってもらっていました。この日は明和八年七月二三日、その前に剃ったのは七月五日で、二〇日弱空いています。彦七はこの間登山などはしていませんが、ちょうど加子母のなかで大量抜け参り騒動が起きたころでした。⁽⁴⁶⁾家事を取り仕切ってくれるおいくやおまつがいなくなり、忙しい日々を送るなか、月代のことなどすっかり忘れてしまっていたのかもしれない。

この場合は彦七の「うっかり」ですが、当時は月代を剃ることを「禁止」される期間もありました。それは、天皇や將軍などの逝去にあたって喪に服す場合です。普請(工事)などを禁止する鳴物停止令^{なりものちようじれい}と同様に、「悲しみのあまり身だしなみをする気力もなく、月代や髭をのび放題にしているという状態を強制する」⁽⁴⁷⁾ために月代停止令が出されたのです。

彦七の日記には、安永二年六月一八日に中将様^{ちゆうしょうよう}(九代尾張藩主徳川宗睦^{むねむち}の長男治休^{はるよし})が逝去した際の月代停止について記載がみられます。彦七が日記とは別に残した「御用状留」^{ごようじょうどめ}もあわせてみると、このときは二二日ごろ



(48)

安永二年「巳年中御用状留」(林三八八―一三)。

から中将様の逝去と「月額不剃筈之旨」が触れられていたようですが、登山中だった彦七はそれを知らず、二四日には月代を剃っています。御目付方からの書簡が届いたのは二六日になってからで、事態を把握した彦七は早速今井勘兵衛へ月代停止の旨を伝えました。尾張藩では武士身分とそれ以外の「士外之者」で禁止の期間が異なり、「士外之者」は逝去からおよそ一四日後、七月三日から月代を剃ることが許されました。しかし彦七がこれを知ったのはやはり少し遅く、五日になってからでした。もともと届く情報が遅いのですから、月代停止の正確な期間を守ることは難しかったです。

月代を剃るか剃らないか、これは極めて個人的なことのようにも思われます。しかしこの一件からは、月代は藩や彦七の身分とも密接に関わる事象であったことが見て取れます。

夜の用心

さて、当時は「灯り」という問題もあり、生活にあたって日昇と日没が重要視されたことは、冒頭の章で述べたとおりです。しかし、先にみたもらい湯の例などからは、加子母のひとびとは案外「夜」の時間も楽しんでいたことがうかがえます。晩年には体調の悪化もあり家に籠りがちだった彦七も、元気なころは夜遅くまで

(49)
明和四年、一〇月二二日条。

外出しています。たとえば明和四年の一〇月、彦七は八ツ頃(午後二時ごろ)に出発し、《舁屋》利左衛門の家を訪れました。利左衛門の家には山役人の水谷七十郎と宇野新右衛門がやってきていて、彦七は同席して酒を酌み交わします。そうしている間に遅くなり、暮前にはお暇しようとしたところ、二人に強く留められ、結局そのまま「遊あそび居おり」(のんびりし)、夕飯もご馳走になって、お風呂まで借りました。このころから雪が大降りになりましたが、暮には長男の善右衛門もやってきて、またまたお酒が振る舞われます。しばらく緩々ゆるゆると談笑した後、幸吉という人に松明を灯ともしてもらい、彦七と善右衛門はようやく帰路についたのです。

御山守の仕事関係ということで接待に近い面もあったのですが、のんびりと酒を酌み交わし、夜の時間を楽しんでいきます。

こうした光景がみられる一方、やはり夜には物騒なこともあったのでしょうか。ある日、長女のおそよが夜遅くになってやってきて、彦七にこんな相談をしています。

きょうとうきちかくおか
今日藤吉福岡へ相越候 処あいこ尔今不帰候、子共計こどもばかり二而用心等も無心元候 間
たけすけつかわ くれそうろうようもうしきたるすなわちけすけるすいばん つかわ なり
武助遣し呉候様申来、則武助留守居番二遣ス也(明和二年正月二二日条)

おそよの夫藤吉はこの日福岡(現・岐阜県中津川市福岡)を訪れたところ、今になっても帰ってこず、おそよと子どもだけでは「用心」に不安があるので、次男の武助

(50)
安永三年、八月二四日条。

に「留守居番（留守番）に来てもらえないかという相談です。福岡は今の道でも加子母から歩いて四〜五時間ほどかかる場所で、日帰りするつもりでもなかなか難しかったのかもしれない。相談を受けた彦七はおそよの願い通りに武助を向かわせています。このようにおそよは、夜に藤吉が帰ってこないときはもちろん、昼間に「茅苺^{かやかり}」で藤吉が家をあける際にも、わざわざ「ばゝ」に留守番にきてもらったりしています。⁽⁵⁰⁾日記をみるかぎりそうそう物騒な事件が起きていたようには思えませんが、幼い子どもが二人いるということもあって、いろいろと心配事があったのかもしれません。

夜に限らず、家人の留守には不安がつきものです。日記には、誰かがしばらく家を空けることになった場合、その家を訪問する慣行として「留守見舞^{るすみまい}」（留守番をしている家族の安否を問う慣行）がみられます。

たとえば安永三年の三月二四日には、《田中》吉左衛門、番田^{ばんだ}の嘉右衛門・安左衛門、《将監^{しょうげん}》源吉、《野》源六かゝと、大勢の人が次々と内木家へ留守見舞にやってきました。酒やぜんまいなどを手土産として持って来てくれた人もおり、彦七も御礼に吸い物や酒を出しておもてなしをしています。このとき内木家を留守にしていたのは、彦七の妻である「ばゝ」です。ふだん村を離れることの少ない「ばゝ」が、同じ年頃の女性たちと念願の「開帳参り^{かいちやうまい}」に出かけていたのです。⁽⁵¹⁾「ばゝ」た

(51)
詳細は前掲太田ブックレット。

ちが出發したのは三月一六日、帰ってきたのは二七日でしたが、二一日ごろから次々と留守見舞がありました。

ほかにも、明和四年二月四～六日には、正月二九日に秋葉參詣へ旅立った長男善右衛門の留守見舞のため、『岩屋』おつき、『上いづみ』佐助・佐助母、『富田』次郎兵衛が内木家へやってきています。佐助母は手土産に赤飯を持ってきてくれたうえ、一晚泊まっていきました。この後、二月七日になって善右衛門は無事帰宅しますが、彦七が善右衛門の帰りが遅いことを心配している姿がみられます。というのも、善右衛門は隣村の付知あたりに辿りついていて、日暮れごろには加子母に戻れるという話だったのに、一向に帰って来なかったのです。結局、善右衛門は夜更けになって帰宅しました。足を痛めてしまい、歩くのに難儀してしまっていたのです。留守見舞と似た慣行としては、『門出祝』^{かどでい祝い}と『酒迎』^{さかむかえ}もありました。門出祝は誰かが出發する前、酒迎は出かけていた人が帰って来た際、親しい人たちを招いて催す祝宴です。酒迎は坂迎ともいい、本来旅から帰って来る人を村境^{むらざかい}などまで出迎えることをいったそうですが、加子母ではその名残はなく、酒を楽しみ、帰ってきた人からお土産をもらう場になっています。酒迎と留守見舞は家人が參詣^{さんけい}で家を空ける場合が多いですが、門出祝は參詣に限らず、お嫁に行く前や旅に出るときなど、広くおこなわれました。このような出立前後の宴会は、出ていく人・帰ってきた人

を労うのはもちろん、「どこそこの家の主人はいま出かけているらしい」「ようやく帰ってきたらしい」といった、諸家の状況を周囲に知らしめるものでもあったのかもしれません。

連絡をとる手段が限られている当時において、誰かの「留守」は今よりもずっと不安を煽るものであったでしょう。一緒に食べたり呑んだり騒ぐことで、誰かの不在に落ち着かない家人を慰めたり、無事に帰ってきた喜びを大いにわかち合う意味が、こうした慣行には込められていたように思われます。

2 季節を過ごす

加子母の一日を朝から夜まで追いかけてきましたが、本章では、季節を感じられる風物詩に注目し、それを出発点として当時の日常を紐解いていきましょう。

(1) 「蚕やしなひ」に大忙し

「こだま」様

安永三年の二月、あまり耳慣れないお祝いが日記に登場します。「こだま祝^{いわい}」というお祝いで、ちょうど二月の初午の日、《富田》の次郎兵衛(二郎兵衛)が「かゝ」を呼びに来ています。

此節次郎兵衛^{このせつじろべえきた}来^きり、こだま祝^{いわい}ひいたし酒有^{さけこれあるあいだきた}之間来^{くれそつうよう}り呉^く候^{こう}様、ば、呼^{よび}二来^{きた}り、
則^{すなわちあいこす}相越^{あひこす}ナリ(安永三年二月一日条)

「こだま」というと「木霊」が頭に浮かびますが、ここでは「蚕^{ようさん}霊」が正しく、養蚕の神さまである「蚕^{こだま}霊様」を意味します。中部や東北地方には、蚕^{ようさん}霊様を祀りその年の豊作を願う「こだま祝」を二月の初午(二月の最初の午の日)のころにおこない、養蚕が終わったところに「こだま揚げ」をする慣行があつたそうです。《富田》

でも、親しい人びとを招いて酒盛りをするこのお祝いを、二月の初午と五月の晦日ごろにおこなっています。

こうしたお祝いの時期からもわかるとおり、養蚕は限られた季節におこなわれた農家の副業です。明治以降は夏や秋にも盛んにおこなわれるようになりましたが、江戸時代は春蚕はるご(52)が中心でした。内木家でも春蚕を手掛けており、四月下旬～六月ごろは常と違う忙しさに翻弄される日々が続られています。

(52)
江戸時代は春正月～三月、夏四～六月、秋七～九月、冬一〇～一二月だが、クワの開葉に合わせて飼われるカイコを春蚕という。

春蚕は桑の開葉に合わせて晩春ごろからはじめられました。安永三年には四月二四日に宮脇みやわきの武兵衛のもとへ亀之助を「蚕迎かいこむかひ」に行かせ、蚕をもらう御礼として小樽の酒を渡したことがみられます。少し経った五月の頭には、おまつやおいくが「蚕柴かいこしば」を茹ゆったり、「菰こも」を集め始めました。これはおそらく繭を作らせるにあたって必要となる「簇まがし」に関する準備でしょう。簇は蚕の人工の巢のようなもので、現在にはボール紙などを井桁いげたに組んだものをよくみかけますが、当時は地域や時代によつてその形はさまざまでした。加子母でどんな簇が使われていたか、ヒントになる記述が同年五月二八日の日記にみられます。

したやよりしばにぞく柴しば式束むすびくれそうろうよう、やとひ柴しば二結むすびく呉く候しやう様さま、九十郎背負くじゅうろうせおいきた来りきた、則すなわちむすびたてそうろうて結立むすびだて候しやう而り
亀之助かめのすけしたやへもたせつかわ為持遣スナリ

(53)
明和九年五月二二日条。ただしこの年は内木家で養蚕をしていた記述はみられず、近隣の家の繭を見に来たか。

《下屋》の九十郎が柴を二束背負つてやつて来て「やとひ柴」に結んでくれとお



図3 享和3年(1803)『養蚕秘録』(部分、国立国会図書館蔵)

日記の記載と同様と思しき「^{まぶし}簇」が描かれている。なお左では^{たながい}棚飼の様子が描かれているが、日記には^{ひらがい}棚の記述はなく、^{こも}内木家では^{こも}菰を引いて平飼にしていたように思われる。

願いしてきたので、結んであげて、亀之助に持って行かせた、という記事です。簇のやり方のひとつに、柴などを結んで束にするというものがあります。明治中期以降は藁が主流となつて廃れたようですが、江戸時代は山間部で普及していたといえますから、おそらく加子母でも柴の束で作った簇を使い、蚕を繭にさせていたのでしょう。

蚕よく、桑足りず

簇に蚕をうつすには、桑の葉をせっせと与え、蚕が四度脱皮するのを待たねばなりません。蚕の育ち具合は気温に左右され、低ければ発育は遅れ、暖かければ早まります。品種によっても異なるため一概にはいえませんが、孵化から^{しゅうけん}収繭(簇から繭を取り外して収獲する作業)が終わるまでおおよそ一か月と少しであったといいます。日記では早くて五月二二日に「はや出来まゆ」(早く繭になつた蚕を商人の丈助が見に来ていることが書かれており、⁽⁵³⁾蚕飼をはじめて一か月ほどで一段落付く場合もあったようです。

しかし、養蚕稼ぎにあたっては、早く繭になればいいというわ

(54)
安永二年、四月二四日条。

(55)
「昨日桑買来り、前畑分
田口前ニ而壹分ニ源吉ニ売
候。由にて武助差出、壹分
受取ナリ、当年ハ殊外桑咲
方悪敷候。処、先ツ壹分ニ
相成大慶」明和四年、五月
二二日条。

(56)
明和四年、五月二五日条。

(57)
伐木作業場などへ、食料や
資材を背負つて運搬する労
働者。

けではなく、いかに上質な繭にするかも重要でした。良い繭になるかは蚕の良い悪いに加え、桑の葉を十分にあげるかどうかにも左右されます。蚕は成長とともに食べる量がどんどん増えていきますが、あげる桑が少ないと充分に糸を吐かず、薄い繭になってしまうのです。つまり桑の葉の用意が欠かせないのですが、年によつては桑がなかなか手に入らず、頭を悩ませることもありました。

安永三年五月一六日、夕方になつて内木家を訪れた武右衛門(彦七の次男武助)は、「蚕至極能ク」(蚕がとても良いので)桑が足りず、明日桑を買いにいく予定だ、と話しています。二一日には彦七のお見舞いにやってきた妹のおつねも「かいこにてせわしく候由ニ而早速帰ル也」と、蚕の世話が忙しく慌ただしく帰っていきました。どうやらこの年は蚕の成長がよかつたらしく、皆蚕にかかりきりなうえ、武右衛門のように桑探しに奔走する人が続出します。

内木家では持地である「前畑」や「田口前」に桑を植えており、例年四月と五月の末ごろに一部の桑を「桑買」へ売り、伐らせています(「桑買竹原分来り、前畑不残壹分式朱ニ極メ、代金壹分善右受取也」⁽⁵⁴⁾。ほか田口前も売った例など)。桑買は竹原(現岐阜県下呂市宮地あたり)など飛驒から大勢きていたようで、明和四年五月には彦七が小郷にいく途中で「飛州桑買人馬大勢」に会い、持子⁽⁵⁷⁾が道を通れなかつたほどだったといひます。

(58)
安永三年、五月二五日条。

安永三年は「桑買」には売らなかったようですが、おいくは「桑が年々叩き生え（不作）になっていて、もう取り尽くしてしまった」と困っており、「売桑」がないか探してほしいと彦七に頼んでいます。⁽⁵⁸⁾彦七が心当たりをあたってみたところ、角領中嶋で桑を売ってくれることがわかり、さっそく奉公人の徳助に買いに行かせ、その代金としておいくに二百文を貸しました。おそよにも同じ相談をされましたが、角領の桑はなくなってしまう、徳助が越原まで行って「所々相尋」ね、日が暮れるまで探し歩きました。桑は生命力の強い木で、いつの間にかそこらに生えていることは少なくありません。その後、森下で五籠、《酒屋》政助田地で一籠、万賀長左衛方で八籠……と、あちこちに少しづつ生えている桑をかき集め、なんとか充分な桑を手に入れることができたのです。



繭を売る

(59)
安永三年、六月一日条。

(60)
菰の枚数か。

そうして苦労して蚕を育てた甲斐もあり、六月には嬉しい悲鳴があがります。長女のおそよは「今日ハ、夥^{きよう}ク上^{おびたし}り令^{あが}大慶^{たいけい}候^{せめそうろう}」⁽⁵⁹⁾と、大量の蚕が「上がった」(蚕が成長して繭を作らせるための状態になった)と喜んでおり、翌日には族を置くと所思^{おも}き菰^{こも}を借りていつています。三日には「今日迄^{きょうまで}二四拾六枚^{よんじゆうろくまい}」⁽⁶⁰⁾やとひ候^{そうろう}」といつており、相当な数の蚕を育てたことがうかがえます。

蚕が族のなかで無事に繭をつくつたら、繭をとる「まゆもぎ」(収繭)をし、すぐさま「まゆ買」に売りました。地域によっては繭を糸にしてから売るのが普通でしたが、加子母では「糸繰り」「糸引き」の記述が少しみられるものの、こちらに重きを置いていません。「四ッ前^よ比佐^{まごろ}忠次^{さちうじ}内来^{ないきた}り、まゆ撰^より又ハ釜拵^{かましらえ}給^{そうろう}候^{まい}」⁽⁶¹⁾といった記述もみられ、おそらく繭を選り分け、良い繭は売り、あまり良くない繭は釜で煮て糸にし、自家消費したように思われます。

(61)
明和四年、六月一七日条。

(62)
現長野県木曾郡南木曾^{なみきぞ}の三留^{さんりゅう}野^の、あるいは岐阜県加茂郡白川町の水戸野か。

繭は十日ほど孵化してしましますから、売らなれぬばなりません。その点「まゆ買」は良いタイミングでやってきていて、近くの商人では《神^{かん}林^{ばやし}》丈助や商人長助、小郷^{おご}の与兵衛がおり、そのほか水戸野⁽⁶²⁾の清次郎父子などみられます。小郷の与兵衛は木曾辺りまで繭を買いにいつていたり、次郎兵衛も「まゆ買」を案内して滝越(現長野県木曾郡王滝)まで行っています。「まゆ買」の行動範囲

(63)
金一兩＝四分＝銀六〇匁＝
錢四〇〇〇文。米価から
計算した金一兩の価値は、
江戸初期＝約一〇万円、中
後期＝四～六万円、幕
末＝約四千元～一万円程
度とされている(日本銀行
金融研究所 貨幣博物館)。
日記は江戸中期頃のものな
ので、仮に一兩を五万円と
すれば、一文＝一二・五円
で、おいくは約二万三千
円、「ばゝ」は約三万三千
円の稼ぎとなる。

は、「桑買」と同じく広範だったのです。

さて、この年、おいくと「ばゝ」はまゆ買商人清次郎に何度かに分けて繭を売っています。おいくの繭は金一分と錢八百五〇文ですべて錢に換算すると一貫八五〇文、「ばゝ」の繭は金一分・銀一一匁と九五一文で錢換算すると二貫六八四文となり、少し「ばゝ」の方が儲けています。⁽⁶³⁾ おいくと「ばゝ」はそれぞれのアガリを自分の懐にいれ、ホクホクだったでしょう。

(2) 生活の道具と習わし

「傘」事情

さて、春の慌ただしさをみてきましたが、続いてジメジメとした季節にうつっていきましよう。現代でも私たちを悩ませる長雨や湿気は、当時においても暮らしの大敵だったようです。日記には六月(新暦七月)のころ、「かび」や「しめり」の対策として、家具や寝具を干しています。

このたびのながきりて 此度の永降^{つづら}二而、葛籠^{そのほか}・其外も不残^{のこらず}かび候付干也(略)筵も不残^{のこらず}青碁^{あおあか}二相成也、
くれまゑよりまたまたふる 暮前^{そのほか}夕又々降ナリ(宝暦一三年六月五日条)

えいえいのうてし 永々^{そうろう}之雨天^{につき}二而夜着^{はすなり}・ふとん其外悉クしめり候付、今日^{きょう}在小屋^や二而干也(明和

八年六月一七日条、登山中)

(64) 宝暦一三年、五月二六日条。

(65) 風・寒・暑・湿・燥・火。

(66) 仏典のなかでも最大規模といわれる大般若経六〇〇巻を転読（經典の要点部分のみを読み上げること）し、除災招福、鎮護国家などを祈る法会。

梅雨時はこんなふうに家具や道具がカビっぽくなってしまえばかりでなく、人間の身体にも不調をもたらしました。そのため、彦七が「湿払^{しつばらい}」の薬を飲んでいる様子もみられます。⁽⁶⁴⁾「湿払」とは「湿邪^{しつじや}」を払う薬で、「湿邪」は中国古代医学に由来する病名です。気候の不調による病因を六つの「邪」に分けて六淫とする考え方で、現代の私たちにとって身近な「風邪」もここからきています。「風邪」以外は耳馴染みのない言葉になりましたが、季節の変わり目に体調を崩すのは今も昔も変わりなかったことが想像されます。

梅雨時といえば「傘」ですが、日記には傘についての記述も多々みられます。ここでひとつ、傘に関するあるエピソードをみてみましょう。

友次郎^{ともじろう}来り、孫太郎^{まごたろう}同道^{どうどう}付知^{つけち}へ行也^{ゆくなり}、今日^{きょう}大般若^{だいぱんぎや}経紐解^{きんぎゆかい}之由^{のよし}にて、大勢^{おおぜい}付知^{つけち}へ通ル也^{とおなり}（略）孫太郎^{まごたろう}暮前^{くれまえ}帰ル、ばら／＼雨降^{あめふり}出候^{でしやう}付、付知^{つけち}庄屋^{しやうや}へ傘^{かさ}借りニ寄^{かき}り候^{けう}処^{ところ}、借^かし不申^{もうさず}、夫^そ九郎^{くわう}右衛門^{えもん}へ寄^より、傘式^{かさしき}本友次郎^{ほんともじろう}兩人^{ふたり}ニ而^て借^かり来^{きたり}候^{けう} 由申聞候^{よしもうききけう}（安永二年閏三月二日）

ある日、長女おそよの子である友次郎がやってきて、孫太郎を誘い、一緒に隣村の付知村へ行きました。この日、付知村では「大般若経紐解^{だいぱんぎやきんぎゆかい}キ」、すなわち大般若経転読^{だいぱんぎやきんぎゆかい}という一大イベントがおこなわれることになっていたので。友次郎と孫太郎はこのとき一五歳前後で、転読だけでなく、友人との遠出も楽しみだったの

つ。
（67）
繭繭。
加子母村旧家のひと

しょう。ちなみに、二人だけでなく、この日は大勢の人が付知村を訪れています。

そうして付知に行き、無事暮れ前に帰ってきた孫太郎は、こんな話をしていきます。「ばらばらと雨が振ってきたから付知の庄屋に傘を借りにいったけれど、貸してくれなかった。だから、九郎右衛門から傘を借りた」。彦七は尾張藩の御山守ということもあってか、折につけ付知村の村役人（庄屋や組頭）とも親交を深めています。それもあって孫太郎は庄屋を頼ったのでしようが、すげなくされ、他に付知でよく知る九郎右衛門に傘を借りたといえます。

孫太郎は他にも土産話をしようですが、しつかり書き残されているのはこの傘の件だけです。可愛い孫に対する庄屋の意地悪な態度が、彦七の癪（かん）にさわたたのかもしれない。

さて、ここに出てきた傘の貸し借りについて、もう少し別のエピソードもみてみましょう。

明和九年正月二〇日の四ツ頃（二〇時ごろ）、商人の林左衛門が内木家にやってきて、「去年の冬に小郷（加子母村内の字）で傘を借りてどこかに置き忘れてしまったのだが、もしやお宅にないだろうか」と聞いてきました。そこで探してみたところ、「幸繭（こうけつ）源左衛門」と書き付けのある古い傘が見つかります。これがお目当ての傘だったらしく、さっそく林左衛門に渡してあげました。

(68)
明和五年、九月一五日条。

彦七の家には来客がひっきりなしに来ていますから、知らない傘が家にあっても気にしていなかったのでしょうか。先にみた孫太郎もそうですが、彦七も出先でしょっちゅう傘を借りています。傘を持ってきたはいいものの邪魔になったら近くの家に預けるということもしていて、天気予報も折り畳み傘もない時代、傘の貸し借りや預け置きがよくあることだったことが見て取れます。

ただし、貸し借りが多かったからといって、今のビニール傘のように「もうどれが誰のものかわからないから適当に貸し借りしよう」というふうには傘が扱われていたわけではありません。借りた傘を丁寧に藁で包んで送り返している様子などもみられますし、林左衛門が探していた傘のように、目印として名前や屋号を書くこともしばしばありました。江戸では呉服屋の三井越後屋が屋号の入った傘を客に無料で貸し出したところ、大変な宣伝効果になったという話は有名でしょう。彦七の長女おそよの夫である藤吉も、あるとき傘を二本持参して、彦七に「書付^{かきつけ}」をお願いしています。⁶⁸ 藤吉も文字は書けたはずですが、どうせ書いてもらうなら見映えのする方が良く、達筆な彦七にお願いをしたのかもしれない。

当時の傘には蛇の目傘・大黒屋傘・紅葉傘などさまざまな種類があり、その値段もピンからキリまでありました。日記には一四五文あるいは二本で二九〇文といった記載がみられます。現在の金額に換算することは容易にできませんが、仮に計算

(69)
前掲註63と同じ計算の場合。

すればおおよそ一本二〇〇〇円前後⁽⁶⁹⁾。当時の傘としては比較的安価なものがやりとりされていたことがうかがえます。

とはいえ、欲しいと思えばすぐに手に入ったものでもないようです。安永二年八月三日、川上の《酒屋》伝次郎という人が、「傘白張^{かさしろはり}」を二本送ってきてくれました。実はこの前年に「もし出来合^{できあい}の傘があれば買いたい」と伝次郎に尋ねてみたものの、「無い」といわれてそのままにしていたら、今になって送ってきてくれたのです。《酒屋》伝次郎はモノを仕入れて商いをしてきたか、自分で傘を張れるひとだったのでしょうか。年をまたいで気にかけてもらい、彦七は「かえって申し訳ない」とその心情を記しています。

日記には、付知村の庄屋から、傘の「柄」になる紫竹^{しちく}をもらったことなども書かれています。

「出来合」のものでなく「こういう傘が欲しい」という場合は、材料を持ち込んで作成を依頼することもあったようです。もちろん、壊れたら直すのも当たり前で、「傘師」の定助(貞助)に傘を張り替えてもらっている様子もしばしばみられます。



(70)

味鏡は現愛知県名古屋市中心部で、万歳は家々を訪れて祝言を述べ、舞を演じる門付け芸人のこと。味鏡万歳は三河万歳、尾張万歳などとならび、当時勢力を得ており、加子母の方にも入ってきていたことがわかる。昭和九年二月一九日には「万歳親子来り」とあり、親子でやってきていたことが見て取れる。

(71)

ただし「黒星」にあたる年齢は現代定着している厄年の年齢とは異なる。たとえば享保二〇年生まれの善右衛門は、明和二年(数え年三十一歳)、明和八年(三七歳)、安永三年(四〇歳)が黒星とされている。

す。お金さえあればいつでも何でも手に入るわけではない当時において、自分たちで手を入れながらモノを扱っていた様子が見て取れます。

家の神様

モノを大事に扱い、そしてモノにまつわる神様に感謝を伝える。そうした慣行は、当時どこにでもみられるものでした。一家を守護する「家の神」を祀るのが代表的な例で、竈の神、屋敷神、厩の神や納戸神などがあり、とりわけ広い地域で竈神を祀る慣行がみられたそうです。竈神はかまどや囲炉裏を守る火の神で、西日本では荒神とも呼ばれます。

彦七の日記にも「荒神祭り」「荒神納め」がしばしば登場します。時期は二月下旬、もしくは三月下旬ごろで、山伏の誠教院か、味鏡万歳に祈禱をお願いしていたようです。

此朝誠教院来ル、昨日下午林へ来り泊り、唯今帰りかけ之由、荒神祭りの儀きのうぜんうたのみおきそろうよしもしきそろうにつきすなわちたのむなり、まごたろうひとなるゆゑ、荒神祭りの儀昨日善右奨置候、由申聞候付、則奨也、孫太郎三壺樽取寄セ吸物・さけかきまい、きとういた、もうすなり、ひるごろまで、きとうあいすみ、めし、さけ、てきようおうもうすなり、ふせもの酒振舞、祈禱致さ七申也、昼比迄三祈禱相済、飯・酒二而饗応申也、為布施物、百文差出ス也、武助・亀之助当年黒星ニ相当り候付、星祭り之儀奨遣スナリ、夫々同人ハ帰(明和五年二月二〇日)

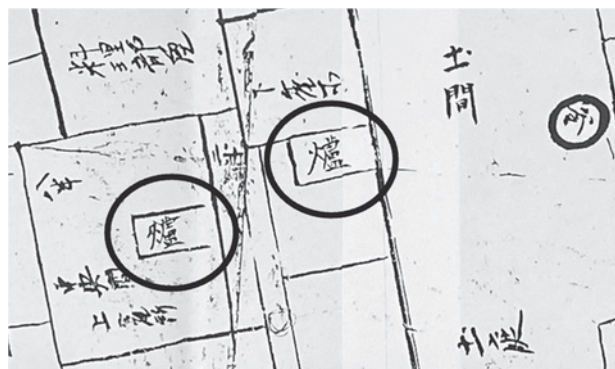


図4 内木家の間取り図(部分、内木哲朗家所蔵のものを加工引用)「爐」と書かれた部分が囲炉裏で、二つあったことが確認できる。

(72)
明和八年、一〇月二六日条。

(73)

明和四年、二月二〇日条。

この朝山伏の誠教院がやってきて、昨日は《下林》に行き泊まったが、善右衛門から「荒神祭り」を頼まれたので、帰りがけにやってきたといひます。それを聞いた彦七は改めて「荒神祭り」をお願いし、孫太郎に酒をもつてこさせ、吸い物と酒を振る舞い、祈禱をしてもらいました。祈禱は昼ごろまでに済み、改めて飯と酒でもてなしをしたうえで、お布施として百文を渡します。ついでに、武助と亀之助が

今年「黒星」にあたっているので、後日「星祭り」をしてくれるようお願いしました。山伏は修験者とも呼ばれる宗教者で、近世では町や村に定住し祈禱師的存在として役割を果たしていました。内木家でもなにかにつけ誠教院に祈禱をお願いしており、ここでは例年の荒神祭りに加え、「黒星」(厄年)にあたっている善右衛門と亀之助について「星祭り」という祈禱を頼んでいます。(72)

荒神については、こうした祈禱をお願いする以外にも、折につけお神酒を献じたり、(73)「善右・武助共同道、村荒神様江御宮籠り」と(こうしん籠り)「荒神籠」をしており、信仰の厚さを垣間見ることがができます。

火の神である荒神を大事に祀るのは、いまの生活よりもずっと「火」が身近だったこともあるでしょう。とりわけ囲炉裏は暖をとったり、照明としても役立つのはもちろん、家族が食事をする団

らんの場であり、その席次が厳密に決められるなど、一家において大事な位置を占めていました。

(74)
明和九年、二月二二日条。

(75)
安永二年、二月一九日条。

かつての彦七の住居にはご子孫である内木哲朗さん一家がお住まいですが、現在も囲炉裏は現役です。内木氏所蔵の間取図によれば、かつて内木家にはふたつの囲炉裏がありましたが、ひとつは埋めて潰されたようです。日記を見ると、「暮合善右くれあいぜん 右う 囲炉裏いろり 二ツふた ながら(74) 塗也」などがあり、善右衛門が折にふれて二つの囲炉裏の手入れをしていたことがうかがえます。また、安永二年には「いろり三尺さんしやく 引上ひきあ 候付そうろうにつき、根太ねだ よりし仕直しなお し申もうす」との記載がみられます。勝手の囲炉裏の場所を約一メートルほどつし、根太(床板を支える横木)から作り直したということで、このとき囲炉裏の場所がうつされたようです。作業は善右衛門・大工・武助と三人がかりで、暮前には移動がおわり、暮になってから囲炉裏を塗り立てました。

煤すす 払い

囲炉裏や竈かまどの燃料は炭や薪たきぎですが、当時はこれらを調達するのに苦労があったのはもちろん、使い続けるうちに家中に「煤すす」がついてしまうという問題もありました。このため、年末には家中の煤を払って清める「煤払い(煤掃きとも)」がおこなわれました。かつては正月事始めの日から正月の準備にとりかかりましたが、煤払い

はその最初の行事です。内木家でも、煤払いを毎年かさずおこなっています。

善右・武助・おいく煤払(略)日はつり過迄三煤払相済也(明和四年二月一二日条)

今日吉日三而善右夫婦・おまつ煤払ナリ(安永二年二月一五日条)

煤払いは今の大掃除のようなものでしょうが、一家全員でするのではなく、おおむね善右衛門とおいく夫婦の役割で、年によつては「か、」やおまつ・武助も手伝いました。また、正月事始めの日は二月一三日とされますが、内木家ではその後の「吉日」や、天気の良い日におこなっていたようです。

半日がかりの大変な作業ですから、煤払いをしない家族は家に居づらかったらしく、こんな記述もみられます。

天気吉、今日煤払也(略)

次郎兵衛方も今日煤払之

由二而、母人ハ善六方へ御

越被成候 由(宝暦十三年

二月十七日条)

《富田》の次郎兵衛方で煤払いがおこなわれる日、《富田》に住む彦七の「母人」が善六の



家に行っています。煤払いのとき、老人や子供などが邪魔にならないようよそに行くことを、煤逃すすにけといいました。彦七も煤払いの日には《富田》などへ行き、一日緩々と遊んで、終わったところに帰っています。

こうして煤を落してさっぱりし、種々の正月準備を終えれば、あとは新年を待つばかり。大晦日の日、彦七は大抵「目出度めでたくみなみないそらいとしとり皆々相揃年取、大慶たいけい」みなみなぶなんにあいそいととしとり「皆々無難相揃年取目出度めでたくく」といった文言を日記に記しています。「年取」とは、新年を迎えてひとつ年をとることを祝う年越しの行事です。現在は個々人がそれぞれの誕生日にひとつ年をとりますが、当時は年が明けると皆年齢がひとつ増えるため、「年取」といったのです。新年を迎えることはもちろん、家族がそろって年を重ねられることは、彦七にとって大きな喜びだったに違いありません。

(3) 奉公人の働き

年の瀬に探す奉公人

年の瀬といえば、内木家にはいまひとつ重要な出来事がありました。それは、「奉公人」(下男)の獲得です。東北地方では一二月に「奉公人市」が立つほどであったといいますが、家の重要な労働力になる奉公人探しは、彦七や善右衛門にとっても年末の心配事のひとつでした。

2 季節を過ごす

(76)
安永二年、三月二日条。

(77)
窯焚。薪のこと。

(78)
宝暦十三年、二月二十六日条。

内木家では例年、一、二人の年季奉公人を雇っています。奉公契約はおおよそ一年間（二月一日前後～翌年同日頃）で、翌年も契約を更新することもあれば、なかには半季限りということもありました。日記が残っている約一〇年間の間、九、一〇名ほどが内木家に住み込みの年季奉公に来ています。

江戸時代にはさまざまな奉公の形式があり、奉公先が武家なのか商家なのか、はたまた農家なのか等でその様相は大きく異なりました。ただ、全体的な傾向としていえるのは、江戸時代のはじめは一〇年などの長い年季契約が多かったのが、次第に短くなり、一年や半年契約、果ては日雇いも一般的になっていったということです。内木家の奉公契約は、江戸中期としては一般的な形であったといえます。

加えて、農村奉公人は家を継がない百姓の次男・三男、あるいは田畑を持つていない無高層が多く、女子よりも男子の数が多かったようです。内木家の場合も、男の奉公人がほとんどです。若い女性も力仕事はしましたが、男手があるのに越したことはなかったのでしょうか。「善右・徳助此日石背負、石垣築也」「此日武助・幸次郎、釜だき割也」などと、奉公人の徳助や幸次郎が善右衛門らとともに重労働をしている姿がみられます。奉公に来てくれるのは加子母村内の人が多かったようですが、みつからない場合はわざわざ隣の付知村まで探しに行きました。内木家にとって奉公人は、なくてはならない大事な労働力だったのです。

ものぐさな徳助

ここからは、内木家に長く勤めたひとりである「徳助」に注目し、奉公人がどういうものであったかを探っていきましょう。

徳助は、明和九年（一七七二）七月から安永三年（一七七四）七月までの二年間、内木家で勤めた奉公人です。父親は村内の《砂場》又市で、兄に又四郎がいました。父又市は、当時夏場を中心に流行した病である「おこり」を「落とす」名人として知られていて、宝暦十三年（一七六三）には「今年は百人余りも落した」などと豪語していたことが記されています。

又市一家の暮らし向きはあまりよくなかったのか、明和四年には彦七に頼みこみ、兄の又四郎を御山守の登山の人足として雇ってもらっています。また、明和五年の一二月には、又市が徳助の奉公先を探し回る姿もみられます。このときは内木家でも奉公人がみつからず困っていましたが、ちょうど善右衛門が付知まで赴き奉公人を決めてしまったところでした。それから四年たった明和九年、今度は縁あって内木家に徳助が奉公に来ることになったのです。

徳助の前の奉公人は和吉という人で、明和八年の暮ごろから勤めはじまりましたが、体調不良が続き、翌九年の七月には奉公を辞めることになりました。これは困った、和吉の代わりに暮まで勤めてくれる人はいないだろうかということで、善

(79)
明和九年、七月二日条。

右衛門が《上いづミ》佐助を通して《砂場》又市に相談してみたところ、徳助が奉公に来てくれることになりました。話が決まったその日の夜にさっそく徳助がやってきたので、給金の前金として「^{いちぶ}壹分」を渡しています。⁽⁷⁹⁾当時の年季奉公の給金の出し方はいろいろですが、内木家の場合、はじめに金一分か二分を渡し、その後はお金が必要だと相談されればまた渡し、渡した分を差し引いた給金を契約が切れる際に渡す、という形がとられていました。

この年の徳助の給金はわかりませんが、翌安永二年は一年契約で一両三分、同三年は一両三分弐朱。明和九年は半年契約ということでの半分くらい額だったでしょう。ちなみに、ほかの奉公人の給金も徳助と大差はありません。明和六年の日記には一両一分〓一石四斗五升とあり、一石は成人男性が一年間に消費するお米の量といえますから、徳助はおおよそ一・五人が食べていける位の給与をもらっていたことになります。同時期、他の地域において男奉公人は一年季二両というところも多く、内木家の給金は決して高かったとは



いえません。他方、《富田》の次郎兵衛夫婦は「当年中借金壹兩貳分御座候、此金子返并可申方便無御座」と、内木家に対し一兩二分の借金があるものの、とても返すアテがないといっています。経済状況の悪い家にとっては、大金ともいえる額であったことがうかがいれます。いうまでもなく給金は奉公人にとって大きな問題で、奉公を決める前に額の交渉をすることもよくありました。

いよいよ奉公をはじめるという日、彦七はたいてい「明日吉日二候間、相越候様申付遣」(明日が吉日だから、明日から来るようにと伝えた)などと、次の「吉日」を指定しています。《野》の儀助が娘を奉公に出す際にも、いつが吉日かを尋ねられ、彦七は五日後が「天赦日」という吉日だと答えていますから、吉日に奉公をはじめる慣習があったのでしょう。徳助の場合は話が決まった三日後が吉日で、当日の暮前に約束通り内木家へやってきました。ところが驚くことに、「また近日来ます」と言つてその日は帰つてしまったといひます。現代で勤務初日にそんなことをしたら大顰蹙でしょうが、以前の奉公人又四郎も約束の日に来なかったことがあり、珍しくもなかったのかもしれない。彦七もとくに意に介した様子はなく、それから二日たつて徳助は無事内木家で住み込み奉公をはじめました。

彦七は一年のおよそ三分の一を御山見廻りで外出しているため、年間をとおして奉公人の様子を詳しく知ることはできません。しかし残された記述をつなぎ合わせ

(81)

百姓たちによる利用が許可された森林で伐採された小規模材。自家消費用として消費されていたのか、市場へと流通していたのかについては不明。詳細は太田尚宏『木曾五木』と濃州三ヶ村(徳川林政史研究所編『江戸時代の森林と地域社会』徳川林政史研究所、二〇一八年)。

(82)

安永二年、八月二八日条。

ると、徳助の仕事は一〇月～二月ごろは春木背負⁽⁸¹⁾、三月～九月ごろは農事作業が主で、その他日常的なお遣いに忙しかったことがみてとれます。お遣いは種々様々で、お風呂のお湯汲み、洗濯、荷物の受取り、書簡の受け届け……と、まさしく何でも屋です。ご飯の用意をしている様子はあまりみられません⁽⁸²⁾が、「今日徳助手前林より色々茸取来り、家内楽々也」と、稀に氣を利かせている姿も。内木家で勤めを果たすだけでなく、周囲の家に手伝いに行くこともありました。明和九年九月二〇日、徳助は桑名屋(武助の家)で穀物を臼で挽く手伝いをしています。同日には《鍛冶屋》清兵衛から徳助を一～二日雇いたいと相談があり、彦七は快諾して徳助を送り出しました。

ところで、江戸時代の奉公人の休みは正月とお盆の年二回だけなどともいいますが、徳助もそんなタイトな日々を送っていたのでしょうか。

先述のとおり家内の年間を通した様子はわかりませんが、彦七が丸々一か月いる時の日記を見ると、奉公人について記事で触れていないのは二日～六日程度で、おおよそひとつき二四～二八日程度は仕事をしていたであろうことがうかがえます。奉公人について記載のない二～六日は、書き忘れたなどもあるでしょうが、節句祝や庚申、酒迎、お祭、慶弔などの日が多いです。そういう日も細々とした手伝いはしたでしょうが、実家に帰っている場合もあり、ゆっくり過ごせる日だったこ

とが想像されます。

しかし、日記をめぐってみると、どうやら徳助は、そうした休日以外もかなり休み休み仕事をしていたことがみえてきます。

昨日きのうお幾いく・徳助とくすけ一日平臥居申いちがおりもうしをさうところ候けい、此日このひ八や兩人共早朝りやうにんともさうちやうより起おキ働はたらきもすなり申也しんや（明和九年二月二十五日条）

この日記の前日、おいくと徳助は頭痛のため、一日「平臥（養生）」していたといえます。徳助は頭痛持ちだったようで、月に一、二度床に臥すことは珍しくなく、ほかに腹痛や風氣（風邪）、気分が悪いなどの理由でも度々休んでいたようです。他の奉公人も病気でしばらく休むことはありましたが、徳助のようにちよこちよこ休む例はあまりみられません。安永三年に奉公していた久藏などは、「いたミ所ところ」があつて味噌叩はたきがうまく出来ない日には、わざわざ久藏の母がやってきて手伝いをしてくれました。「休むなんてとんでもない」という、徳助との姿勢の違いが垣間かいま見みられます。⁽⁸³⁾

安永二年の六月、徳助はとりわけ調子を崩していたのか、とある事故が起きてしまっています。

此夜このよけい鶏鳴めい之の比ころ、徳助二階より目舞めまい、庭にわへ落おち、腰打こしうち、氣之毒きのどく（安永二年六月四日条）
鶏鳴（夜明け）のころ、徳助は目眩がして、二階から庭に落ちて腰を打ってしまっ

たのです。彦七はこの日の朝の事柄として「徳助とくすけ疲居申也」と書いており、傍目からみても体調が悪かったのでしょう。腰を痛めた徳助は翌日は一日休み、その後針を打ったり、下呂温泉へ数日療養しに行ったり、医者で「背骨前せほねまえへ打出うちだシ」でもらったりと、さまざまな治療を試みています。しかし荷物持ちや馬牽きといった腰に負担のかかりそうな労働はしばらくできなくなってしまい、これまで通りに勤めを果たせるまでになつたのは、ようやく秋に入ってからでした。

やむを得ない事故とはいえ、こんな風に長い間万全の勤めができなければ、復帰後は身みを粉こにして働きのうなものです。ところが、それからしばらくたった一〇月下旬ごろ、徳助は突如内木家から姿を消してしまいます。お伊勢さんへ「抜け参り」に行ってしまったのです。

抜け参りとは、家内の者や村役人には内緒にしてい、いきなり姿をくらまして「お伊勢参り」に出かけてしまうことをいいます。当時、伊勢に詣もうでることは善行であると認識されていたので、抜け参りをされてもなかなか非難することができないという風潮がありました。明和八年には加子母村内で大量の抜け参りがあり、内木家でも飯を炊く者がいなくなってしまうと、彦七が随分と困ったことが日記に書かれています。

しかし、今回はとくにそうした抜け参りブームは周囲で起きていません。徳助は

自分で思い立ったのか、あるいは「つれ」(連れ)がいたようですから、誘われて決行したのでしょう。いずれにせよ、明和八年の抜け参りブームの際、奉公人の佐兵衛が最後まで遠慮していたことを考えれば、随分と大胆な行動だったように思われます。

徳助が姿を消したらしい一〇月二五日から三日経ち、徳助の父又市が内木家を訪問しました。いわく、「昨日万賀の人から徳助が抜け参りをしたと聞かされた。代参(代わりに参詣すること)としてかと思ったが、どうもそうではないということ、驚いてこちらに来た」などと話しています。兄の又四郎も後日徳助のことで挨拶に来ており、抜け参りを許す慣行がある一方で、当人の周囲が氣を遣っていたことがうかがえます。結局徳助は、姿を消してから一〇日余り過ぎた十一月五日の夜にひょっこり帰ってきたのでした。

これだけいろいろなことがあれば、徳助の給金は減額されても仕方がないでしょう。しかし、徳助との間にそうした話し合いがおこなわれた形跡はみられません。それどころか、約束の期間が終わったあとも徳助は奉公を続けることになりました。徳助と契約の切れる安永二年の一二月ごろ、内木家では奉公人を二人探しましたが、一人は見つかったものの、もう一人が見つからず、徳助の家《砂場》に相談することになったのです。徳助は打診のあった一二月一六日にさっそく内木家に行きました。

て、「今年もお世話になったのだから、来年もお引き受けして勤めなさいと、父と兄に言われました」と挨拶し、数日後から改めて奉公を始めることとなりました。

しかし、実のところ徳助は内木家での勤めに不満があったのかもしれませんが。というのも、四月になってから、徳助はおそよの夫藤吉を通して「御暇貫申度」と、奉公を辞めたい旨を相談してきたのです。その理由として徳助は、「私儀御氣にも入不申様相見申候」(私のことがお気に召さないようにみえる)と述べたといいます(三日)。彦七の日記には徳助への不満は書かれていませんが、この申し出に対し善右衛門は「勝手次第二いたし候様、此上たのミ申所存無之」(思うようにしてかまわない。これ以上頼むつもりはない)とやや突き放した回答をしています。徳助は善右衛門とともに春木背負などをするが多かったので、あるいは善右衛門との間に不和が生じていたのかもしれませんが。そうして徳助は七月までの半年契約ということになり、「暇」を願いだした三か月後の七月一日、長らく勤めた内木家を後にすることになりました。

奉公人のその後

さて、奉公を辞めた奉公人は、その後どうやって身を立てたのでしょうか。日記をみている限り、やはり新たな奉公先を探すのが常でした。村内の「庄屋」や近隣の

御厩野、やや離れた妻木村(現岐阜県土岐市)や細久手宿(同瑞浪市)、あるいは飛驒国の方などで、加子母の人びとは新たな奉公先を見つけていたようです。しかし、徳助の場合は新たな奉公先を探さなかったのか、その後もたびたび内木家を訪れ、ちよつとした手伝いをしています。どうやら内木家には年季奉公人以外にも手伝いをしてくれる人たちがいたようで、徳助はその一人になったことがうかがわれるのです。

生まれ育った村で、ちよつとした手伝いをして生きていけるのであれば、それによつたことはなかったでしょう。ただ、内木家に度々手伝いに来ていた藤助という人に対して、彦七はこんなことをいつています。

(84)

明和八年、一二月三三日条。

藤助儀永々居申候而口過之沙汰も無之付、兎角奉公相尋可然旨為申渡遣スナリ(84)（藤助は内木家に長年に渡って来てくれているが、生計をたてる手立てもないの

だから、とにかく奉公先を探したほうがよい、と申し渡した）

(85)

彦七家を基準にして、白川上流側のことを「上」または「奥」と呼んでいた。

「口過」、すなわち生計をたてる手立てがないというからには、藤助の家は田畑を持っていない無高層だったのかもしれませんが。この話を藤助にした後、藤助の母が借金のお願いにやって来ましたが、彦七はこれを断り、「奥」⁽⁸⁵⁾へ奉公先を探しに行つた方がいいと伝えています。彦七はしばしば奉公人や手伝い人の求めに応じお金を用立てていますが、藤助の家はお金を貸しても焼け石に水という状況だったの

でしょう。

内木家にとってはなくてはならない奉公人やお手伝い。しかし彼らが奉公人として働く背景には、なかなか退^のつ引^びきならない家々の経済状況があったことがみてるのです。

3 変わっていく日常

時間や季節とともに移ろう加子母の日々。しかし、人の一日というものは、年を重ねることによっても徐々に変わっていくものです。ここでは彦七とその妻である「かゝ」に焦点をあて、いかに二人の日常が移り変わっていったのかを追いかけていきたいと思います。

(1) 彦七の隠居

相続に至るまで

日記の筆者彦七が御山守見習いを勤めはじめたのは享保一三年（一七二八）、それから四六年を経た安永三年（一七七四）九月には、尾張藩に隠居願を出しています。病状が著しく悪化したこと等が理由でしたが、結局隠居は認められないまま安永四年六月に彦七は逝去。その後、長男善右衛門が御山守を引き継ぐとともに「彦七」を襲名し、御山守見習としては孫太郎（安次郎）が認められて「善右衛門」を名乗ることとなります。

一方で彦七が「家長」として隠居したのはもともと早く、安永二年（一七七三）二月

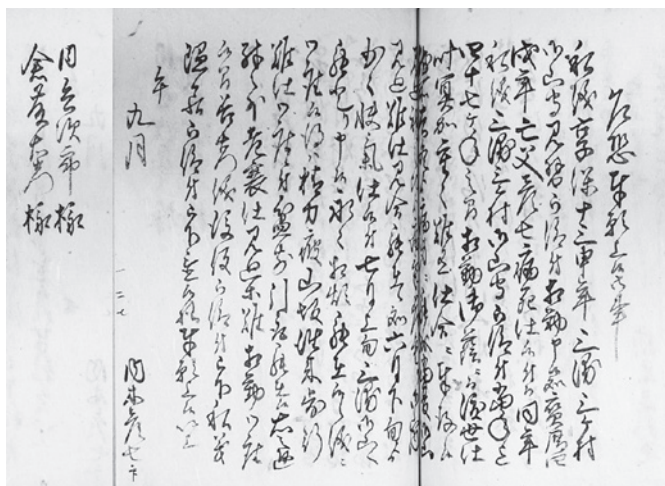


図5 日下部兵次郎・倉林藤右衛門に提出された彦七の隠居願い写
(徳川林政史研究所蔵)
「殊之外老衰」し、山内の見廻り等が難しいことから、善右衛門に役儀を譲り、自身は隠居したいという考えが綴られている。

息子たちへの眼差し

こうして書くと、二人の息子への相続はあっさり決まったようにみえますが、そこに至るまではやはり道のりがありました。彦七とおいくの嫁・舅事件を先に取り上げましたが、善右衛門・武助との親子関係もなかなか難しいところがあったのです。

一二日に「御身上御引渡し」をおこなっている様子がみられます。すなわち、長男の善右衛門と次男の武助に正式に身代を譲ったのです。彦七は尾張藩から御山守の給与として五人扶持(五人世帯の生計を保つことができるぐらいの給与)をもらっていました。それは別に農家としての持高が三石九斗五升あり、このうち善右衛門に三分の二を与えて《桑原》を相続させること、武助に三分の一を分け与え、武助を家長とした分家《桑野屋》をたてることがこの日に取り決められました。彦七は酒を一樽取り寄せ、善右衛門と武助へ「引渡し之盃」をしています。

明和四年の三月、おそよの夫藤吉が夜に内木家を訪れます。藤吉いわく、一昨日に善右衛門の草履がなくなったことをめぐり、なんと善右衛門が武助を「打擲」した(殴った)といっています。藤吉は武助が恥をかいて気の毒だといい、彦七に対し「御了簡」(とりはからい)をお願いしますが、彦七は「私の子どもは皆わがままで、親にも遠慮がない。たびたび世話を焼いてきたが、自分の考えを通して一向に話を聞かない。仕方がないから、最近は今全く面倒をみていないのだ」と、やや突き放した答えを返しています。その後、おつねや清十郎も同様のうかがいをしていますが、彦七は同じ言葉を返し、周囲の心配を聞き流しました。

善右衛門と武助の不仲は男兄弟のよくある話のように思えますが、江戸時代は次男以下がひととき不遇であるという、現在との相違があります。「部屋住」などとも呼ばれる次男以下は実家で起居し、妻帯もできないまま一生を終えることも珍しくありません。内木家の跡を継ぎ、御山守見習も務め、妻も子どももいる善右衛門。それに対し、家の農業の手伝いで日々を過ごし、家族を持ってない武助。両者の間に、単なる不仲以上のものがあってもおかしくはありません。彦七もかつては口を出していたようですが、このころにはもう静観せざるを得ない状況になっていたのでしょうか。

その後も武助は自分の身の振り方に思い悩んでいます。三年後の明和七年(一

(87)
詳細は高木まどか・萱田寛也『林政史ブックレット 尾張藩の林政と森林文化七子どもから大人へ——江戸時代のくかしも生活』③
——『公益財団法人徳川黎明会 徳川林政史研究所、二〇二三年』参照。

七七〇)には新宅を建ててもらい、『桑野屋』として「別家」することが叶います。翌八年には《田口》おしのと結婚。頻繁に夫婦喧嘩を起こし、一時は離婚の危機ともなりましたが、離婚騒ぎの最中でおしこの妊娠が発覚し、夫婦仲は落ち着きをもせていきました。

武助も親の手を離れ、孫たちもすくすく育ち、彦七も肩の荷が下りたのでしょうか。翌九年の一二月、おまつの再縁の話が舞い込んだことから、彦七は俄に息子たちへ家のことを任せる姿勢をみせはじめます。

次女のおまつは明和五年に隣村の付知へ嫁ぎましたが、どうにも折り合いが悪く、半年ほどで離縁に至っています。その後はそれまで通り内木家で日々を過ごしていました。明和九年になり、木曾谷の忠右衛門を介して《上貝戸》領助との再縁話が持ち込まれました(二月六日)。姉のおそよがおまつのを聞いてみたところ、「親達兄弟衆心任せ」(親や兄弟たちの考えに従います)と答えたといい、それを聞いた彦七は「善石・武助・藤吉、其外打寄り異見次第相極々候様、我等ハ毛頭存寄無之候」(善石・武助・藤吉らに話し合って決めてもらう。私には何の考えもない)といい、その判断を息子たちやおそよの夫藤吉に委ねる姿勢をみせました(一〇日)。おまつは初婚の際は彦七・「か」・仲人の清十郎が考えを巡らせていたこと、彦七の身上渡しがこの二か月後におこなわれたことを鑑みれば、彦七のなかに「家のこと

を次世代に任せたい」という思いが芽生えていたことは明らかでしょう。

このとき彦七は「何の考えもない」といつていますが、実のところ、この縁談は断るべきだと考えていたようです。しかし、それを善右衛門らに明言することはせず、「縁談について暦で方角を見合わせたが、金禰こんねん（大凶方）なので、よくよく考えるように」と伝え、「否」の答えをだすよう仕向けています。はじめから手放しで任せるというよりは、まずは家を担う意識を息子たちにもたせることが、このときの彦七の目的だったのかもしれませんが。直接の跡継ぎである善右衛門だけでなく、武助と藤吉にも話し合わせているあたり、息子たちが協力し合うことも望んでいたのでしょう。

この二か月後には無事身上渡しがおこなわれましたが、さらに一か月後、今度は大酒で「考え違ひ」を起こした武助が悪態を吐き、善右衛門を怒らせるという喧嘩が勃発しました。⁽⁸⁸⁾ 身上を渡そうが、まだまだ子どもは子ども。彦七はさぞや冷ややかな態度をとるだろう……と思いきや、二人の間をとりなす姿勢をみせました。かつて兄弟喧嘩を無視していたころからは、また少し心境の変化があったことがうかがえます。

(88)
安永二年、閏三月九日条。

(2) 「か、」から「ば、」へ

家政を譲る

さて、ここからは彦七を支えた「か、」に目を向けてみましょう。その本名がわからないのははじめにも触れたとおりですが、実家は加子母村の小郷という集落に居住する今井勘兵衛家か、その縁戚であったようです。今井家は、彦七の父武益が御山守になるきっかけとなった享保一三年（一七二八）の飛驒国との国境決定の際に協力した家の一つですから、そうした縁で彦七と「か、」は夫婦になったのかもしれません。結婚の時期ははっきりしませんが、長男善右衛門は享保二〇年（一七三五）の生まれです。彦七の亡くなった安永四年（一七七五）まで、少なくとも四〇年は連れ添った夫婦ということになります（天明三年（一七八三）八月没）。

前節では彦七が善右衛門と武助に「身上」渡しをおこなったことを紹介しましたが、同日（安永二年二月一二日）の日記には彦七の譲渡に続き「ば、もおいくへ引渡ひきわた、さかずき すますなり 盃さかずき まで済也」とあります。興味深いことに、彦七の妻である「か、」もまた、家政の切り盛りを善右衛門の嫁であるおいくに譲ったことがわかるのです。子どもの年齢などから考えると、このとき「か、」は還暦のころくらいだったように思われます。

(89)
安永二年、二月八日条。

家長の妻が家政を譲ることは、地域によつてはシャクシワタシ、シャモジワタシなどと呼ばれ、家政管理者としての「主婦権」を譲る重要な儀礼であつたといわれています。しかし「いつ」という明確な決まりはなく、なかなか引き渡してもらえずに苦勞するお嫁さんも多かつたとか。シンシヨワタシなどと呼ばれる「家長権」の譲渡に伴い「主婦権」が譲渡されることもあつたようで、彦七家の場合はそのケースであつたといえます。安永二年に譲渡したはつきりした理由はわかりませんが、彦七は「身体世話退屈」(身体や氣力が衰えた)のため譲ると語つていて、年齢や病状の悪化を考慮したものだったのかもしれない。

(90)
明和五年、二月一八日条。

まつたくの推測ではありますが、そうした体力的な問題にくわえ、譲渡には「か、」の要望も絡んでいたのではないかと思います。というのも、次男武助が明和七年(一七七〇)に新宅を建ててもらい《桑野屋》として「別家」する過程でも、「か、余り及催促候付」か、が余りに催促するので彦七がいろいろと思案したとあり、次男の身の振り方を心配した「か、」の強い要望が彦七の判断の背景にあつたことがうかがえるからです。

先にもふれたとおり、江戸時代は次男以下の多くが実家で起居する「ひや飯くらい」の境遇にありました。そんななか、武助は幸運にも「別家」となりましたが、正式に「分家」をしたわけではなく、彦七の所持する田畑を任され生計を維持する

に留まっていました。しかし、明和八年（一七七二）の末には武助の第一子万之助も生まれ、無事すくすくと成長。「かゝ」も子守のために足繁く《桑野屋》へ通っています。寄る年波、そろそろ正式に身代を譲り、善右衛門と武助の取り分をはっきりさせようという考えが彦七夫婦のなかに生じたのは、ごく自然なことであつたように思われます。

さて、主婦権の譲渡について触れましたが、そもそも「かゝ」はどんな風に日々を過ごし、長男の妻おいくとどう仕事を分担していたのでしょうか。また、家政の切り盛りを譲り渡した後、そこには変化がみられたのでしょうか。「かゝ」とおいくが担った役割を追いかけてみましょう。

おいくの役割

おいくの仕事は、いわゆる典型的な女性の仕事——たとえば炊事、養蚕・機織り、農作業などが主でした。このなかで、「かゝ」も養蚕や綿作りなどはしていますが、炊事や農作業は減多にかかわっている様子がみられません。

二人の役割がかなりはっきりと分けられていたことは、外出・外泊の様子からもみえてきます。

夕方桑野屋へば、相越、おしの同道田口へ相越、跡分おいくも相越、暮合より

雷鳴、夫々大雨（それよりおおあめ）、おいぐ夜（よる）二人帰ル、ば、ハ不帰也（かえらざるなり）（安永三年四月二二日条）

(91)

安永三年、五月一〇日条。

(92)

明和四年、閏九月二二日条。

(93)

安永三年、一〇月二日条。

これは、《桑野屋》すなわち次男の武助・おしの夫婦の間に生まれた、恒吉の誕生祝の日の記述です。お祝いに参加したおいぐは夜に入り帰ってきた一方、「ば、」はそのまま帰りませんでした。別の日の日記には、皆で田植え後に下屋へお邪魔したときも「暮前（くれまえ）おいぐハ夕飯拵（ゆうはんこしらえ）二帰ル（かえ）」とあり、夕飯の準備のために一足先に帰らねばならなかったことがわかります。帰りが遅いと善右衛門がおいぐを迎えに行くこともありました。（92）もつとも、おいぐ一人に夕飯を任せっぱなしというわけではなく、「おいぐ此夜温飴拵（このようどんこしらえたまわそうろう）給り候、但シ今日（ただきょう）ば、小麦挽（こむぎひき）、右粉也（みぎこなり）」などと分担していた様子もみえ、善右衛門やおまつがご飯を用意してくれる日もあります。ただ、なにかしら特別な日でなければ、おいぐが家事を忘れてのんびりしたり、外泊するというのは難しいことだったように思われます。

おいぐがいなくなる日

そんなおいぐですが、内木家からいなくなればいけないときがありました。それは、「血差合（ちさしあい）」の間です。

明和四年八月六日、内木家に遊びにきていたおそよが夕方に帰ったと思ったら、「血差合」のせいなのか、おそよが急に手足をか屈めてうずくまってしまい「大切」

（危篤）であるようにみえる、という知らせがきました。慌てて彦七が《下屋》に駆けつけると、おそよは大層「しゅつなかり」（術無がる、苦しがること）、可哀想なほどであったといえます。近所の清十郎が医者と呼んでくれましたが、しばらくすると少し良くなったようにみえたので、彦七は帰宅しました。心配で《下屋》に泊まった次女のおまつから、おそよはだいぶ良くなったと翌朝になって聞き、彦七はほっと一息ついています。

「血差合」、すなわち月経についての記述です。現代でも女性の悩みの種である月経ですが、当時においてもそれに変わりはなく、おそよの場合は医者と呼ぶほどひどい症状を起こしていた様子が見て取れます。こうした事態にそなえてか、おいくなどは婦人用の漢方薬「安神散」あんしんさんを定期的に購入していたようです。

医者にかかるのも薬を呑むのも現代に通じた対処法ですが、他方、今とは全く違った慣習もありました。

お幾いくき昨日きのう日ひ分ぶん別べつ二相成ふたさうせい候付こうづき、今日きょう四ツ比よつひ分ぶん下屋げやへ遣シつかわ、清メ申也きよめもうすなり（明和九年正月二三日条）

おいくが昨日から「別」になったので、今日の一〇時ごろから《下屋》へ行かせ、清めた、と書かれています。これだけでは意味がよくわかりませんが、日記には他にも似たような記述がみられます。

お幾儀いくぎ月水げつすいニ相成あいなり候そうろうよし由てニ而とミたあへ相越こ候そうろうにつき付すなわち、則もうすなりきよめ申也なり（明和四年二月一日条）

このあき、いくさじあいこれあり
此朝このあきお幾差合有之いくさじあいこれあり、富田とみだへ相越あいこし、おしけ飯めしたき也なり（安永三年二月二八日条）

おいくが「月水」または「差合」なので、《富田》へ行つた、という記述です。

「別」と「月水」「差合」。言葉は違いますが、すべて「月経」を指しています。《下屋》は長女おそよが嫁いだ家、《富田》は彦七の母と、妹おつね夫婦の家。つまり、おいくは月経中、親類の家に身を寄せていたことがわかるのです。

月経を「別」と呼ぶのは、当時、月経を穢けがれとして忌み、炊事や家屋を家族と「別」にしたことからといいます。民俗誌などを見る限り、月経の際は仮屋かりやや親類宅に泊まり髪をすすぎ清めて帰るといふ地域もあったようなので、あるいは加子母でもそうした形がとられていたのかもしれませんが。

彦七の介抱

このようにおいくが家を出ざるを得ない場合もありましたが、こうした例を除けば、おいくの外泊は珍しいことでした。とりわけ安永のころからは、彦七の病状が悪化し、おいくとおまつが介抱のためにできるだけ家にいるよう気づかっている様子がみられます。

(94)
瀬川清子『女の民俗誌』（東京書籍、一九八〇年）。

彦七の体調不良は、現存する日記のはじめの年である宝暦一三年（一七六三）からみられますが、年々、腹・胸・頭などが痛んだり腫れたりするという記述が増していき、安永三年（一七七四）のころからいよいよ病状が悪化したことがわかります。同年四月には周囲の人びとが心配するあまり、どうしたら彦七の病気が治るかをあちこちに聞き回るほどでした。「神木」を伐ったお咎めだとか、「死霊」の祟りだとか、病の要因はさまざまにいわれ、一家は医者や山伏等の「御教」おしえにのっとった対処を続けます。しかし快方には向かわず、安永三年九月には御山守隠居願いを提出するに至ったわけです。

このころの日記は彦七の苦しみがありありと伝わってきて、読むだけでも辛いのですが、そんななか、おいく達が彦七に心を砕いていることもよくわかります。

このひ 此日も彦七腹いたミ、難儀なんぎく、夕飯ゆうめしニおいくそは切拵（蕎麦）きりこしらえたまわそうろうじろ給り候所、夫よりそれ

よるじゅうおいたみて 夜中大痛ニ而、おしけ・おいく揉給候もみたまいますろう（安永三年一〇月二九日条）

連日の腹痛に悩まされていた彦七は、この日も腹痛がおさまらずに「難儀く」とその心境を吐露しています。夕飯にはせつかくおいくが蕎麦を作ってくれましたが、その時分から夜中「大痛」(激痛)となり、おしげとおいくは苦しむ彦七の痛みを和らげようと、身体を揉んでくれたといえます。この少し後の一二月三日には、さらに彦七の症状が悪化し、大変な騒ぎとなりました。この日は暮前から家内の女

(95)
安永三年、一月三日条。

性と子どもらが《下屋》を訪れていましたが、彦七の腹痛がまたもやひどくなり、女性陣は慌てて《下屋》から帰り、あれこれと「肝煎きもいり」(世話)をしてくれました。しかし痛みは強くなるばかりで皆驚き、一家中や近隣の家の者、医者のお得も駆けつけて、登山中の善右衛門まで呼び戻そうという騒ぎに。雪は大降りにもかかわらず、大勢のひとが訪れて彦七をぎゅうぎゅうに取り囲み、夜明けまで介抱をしてくれたといひます。⁽⁹⁵⁾

このときはなんとか一命をとりとめた彦七ですが、その後は小康を保ちながらも、病は悪化の一途を辿ります。翌安永四年には七日間も日記を書けないほど「不快」な状態にもなりますが、その都度おしげとおいくは彦七を揉み、励ましてくれます。あるときは「此夜一番鶏過迄強ク痛候このよいちばんどりすぎまでつよいいたみくううてだいなんぎ 而大難儀なんぎ」と、夜から明け方まで長い間痛みに苦しみましたが、おしげ・おいくに加え、おそよも駆けつけ、三人が夜中介抱してくれました。⁽⁹⁶⁾お風呂の面倒は娘のおしげが率先してやってくれたようですが、おいくもできるだけ家から離れず、彦七に何かあった場合に対処できるような心がけていた様子が見て取れます。

(96)
安永四年、四月一八日条。

「かゝ」の役割

こうしたおいくに対して「かゝ」というと、一家のなかでちょっとした外出や

外泊がもつとも多いといっても過言ではありません。

(97)

明和六年、一二月一八日条。

「かゝ」は彦七のお遣いに加え、見舞いや参詣、お祝いごと、法事、講の集まりなどのためにひっきりなしに外出しています。お祭りなど、なにかしら「遊び」に行つて不在のこともあるうえ、「かゝ^{ひるすきころよりいずかた}、昼過比々何方へ相越候哉、此夜不帰也」⁽⁹⁷⁾と、無断外泊も珍しくありませんでした。「かゝ」の帰りが遅いことを心配してか、彦七は奉公人に「かゝ」を迎えに行かせたりもしていますが、それでも帰つて来ないなどということも。おいくが村外にでることは稀ですが、「かゝ」は隣村の付知村に数日滞在するような場合もありました。

こんなふうに書くと「かゝ」は「家をほっぽりだしていた遊び人」という印象を与えかねませんが、決して分別なく外出を重ねていたわけではありません。そのことがわかる例をいくつかみていきましょう。

おいくの兄弟の《上いづミ》佐助はあるときから博奕を打つようになってしまひ、周囲が止めさせようと世話を焼いても聞かず、ついには佐助の母が《かぢや》へ避難するまでになりました。なんとか佐助に考えを改めさせようということ、白羽の矢がたつたのが「かゝ」です。七ツ頃(四時ごろ)より佐助のもとを訪れた「かゝ」は、随分と長い時間説得を続け、「夜半過」⁽⁹⁸⁾ごろになりようやく家に帰つてきたのでした。

(98)

明和四年、三月一三日条。

当時において博奕は御法度で、佐助にはおむめという妻もいます。周囲としては何があっても博奕をやめさせたく、そこで説得の役を担ったのが「か、」だったというわけです。察するに佐助はかなり荒れていたようですが、屈強な男性ではなく「か、」が頼まれたのは、力強さなどとは別種の信頼を周囲から受けていたからでしょう。夫婦喧嘩などの騒ぎに「か、」が呼ばれることも多く、厄介事の仲裁に長けた人だったことが想像されます。

このほか、「か、」が他家の「相伴しやうばん」に呼ばれている例も多くみられます。

今日万きようまんヶ々客有之間、相伴来呉候様いよりわやきた分あひこすなりおつる来り、か、相越也(略)

善右ぜんうもいぜんうわやへ相伴ニ相越候(安永二年三月四日条)

相伴とは「供応の席につらなって正客の相手をし、みずからも供応を受けること」(『日本国語大辞典』)です。ここでは『万賀』への来客をもてなす役として「か、」が呼ばれ、その後『岩屋』からは善右衛門に同様の声がかかったことがわかります。村の催しや集まりにはおいくもしばしば呼ばれていますが、数が多く且つ広範囲から声をかけられているのは、やはり「か、」もしくは善右衛門です。彦七は相伴などに呼ばれても誰かに任せることが多く、あまり歩いています。おそよの舅仁右衛門が亡くなった際も「夕ゆうべへよりば、折々表おりおりおもてへ相越候(99)」と、「か、」に対応を任せている様子がみられます。つまり「か、」は考え無しに家を留守にしてい

(100)
安永二年、二月一三日条。

(101)

詳細は仲泉剛・林幸太郎『林政史ブックレット 尾張藩の林政と森林文化九人・物・お金にみる山村の暮らし—江戸時代の—』かしも生活④「公益財団法人徳川黎明会 徳川林政史研究所、二〇二四年」参照。

(102)

明和二年、一二月六日条。

(103)

宝暦一三年、一二月二四日条。

たのではなく、地域社会に対する内木家の「顔」としての役割を、善右衛門とともに担っていたといえるでしょう。

加えて、「か、」には「貸金」をめぐる役割もありました。「か、」がおいくに家政の切り盛りを譲った次の日には、こんな出来事が記されています。

おいくの兄弟である佐右衛門の具合が悪いというので善右衛門が見舞いに行ったところ、佐右衛門は少し体調がよくなっていて、「金一両を貸してくれないか」と頼んできました。お金を貸すかどうかを「か、」に相談したところ、「いつ必要なのか知らないですが、急場の役に立つなら貸すのがいいでしょう」といいます。

ちょうど夕方にはおいくが機織りに使う「箆」^{おさ}を借りにいくところだったので、そのついでに佐右衛門へ返事を伝えてもらいました。⁽¹⁰⁴⁾

この話で興味深いのは、「お金を貸すか貸さないか」の判断にあたって重視されているのは、ほかでもない「か、」の意見だということです。当時の加子母において金銭貸借は日常적におこなわれていましたが、なかでも「か、」は貸金に関する記述が頻出します。彦七が取り立てなどについて「か、」に言い聞かせる様子もみられる一方、⁽¹⁰⁵⁾貸すかどうかを「か、」へ相談する姿もまみられ、彦七が「か、」の才覚を信用していたことが見て取れます。周囲もそれをわかっていたようで、わざわざ「か、」を呼び出しお酒を振る舞ってお金の無心をするなど、⁽¹⁰⁶⁾まずは「か、」

に話をとおすということがしばしばなされています。

一般的には「主婦権」の譲渡は帳簿のやりくりなども任されるようになるそうですが、彦七一家と善右衛門一家の財布は一つではなかったらしく、「かゝ」が貸しているのは彦七一家もしくは自分の「しんがい」(個人資産)だったようです。安永三年十二月二十七日には、
「此夜又善右式分借り度旨申聞、おしけニ^{このよまたぜんうにぶかたきむぬもうしきけ}相渡させ申也」と、善右衛門が彦七にお金を借りていたことが書かれています。一二月は

ツケ払いの精算時期ですが、この年は御山守の仕事にともない支給されるはずの雑用金(手当)がなかなか来ず、「此夜も雑用不來、氣之毒く」と、彦七も善右衛門に同情を寄せています。雑用金を貰えていないのは彦七も同じでしたが、善右衛門にお金を貸す余裕があるあたり、充分な蓄えがあったのでしょう。いずれおいくも「かゝ」のように采配をふるって家計を潤すようになったのかもしれないませんが、こうした家計事情もあり、彦七の存命中はおいくが貸金を担うには至らなかったよう



です。

呼称の変化

おいくが炊事や農事といった「内」を担うとすれば、「かゝ」が「外」に対する面を担う。それが、内木家における嫁・姑の役割分担でした。そして、それは家政の切り盛りを譲渡した前後で、大きな違いはみられません。そうなってくると「主婦権を譲ったといっても、かゝとおいくに変わりはなかったのでは」と思われるかもしれません。

おそらくそれは、ある一面では事実でしょう。彦七の身上渡しや他の人生儀礼などをみてもそうですが、ある日唐突に立ち位置が変わるといよりは、それ以前から徐々に責務を課され、周囲がその働きを認めるにいたって儀礼がおこなわれるというのが当時の一つのあり方です。おいくも、明和四年には彦七をさんざん怒らせ家を追い出されそうになっていましたが、明和の末ごろからは庚申講に参加したり、「かゝ」へ渡すお金を預かったりと、任される範囲が広がっています。安永二年以降は更にそれが増しており、家長の妻として切り盛りする力を徐々につけていったことが見て取れます。

一方で、目に見えてわかる変化もあります。それは、「かゝ」の呼び名が「ばゝ」

に変わっていったことです。

管見の限り、彦七が「か、」のことを「ば、」とはじめて記したのは、彦七夫婦が身代を譲る四日前、安永二年二月八日です。その後は「ば、」呼びと「か、」呼びが混在し、翌年にはほぼ「ば、」呼びになっています。現代ですと、孫が「おばあちゃん」と呼ぶようになり、それにつられて夫婦間の呼び方も変わることになりますが、彦七の孫たちはとくに大きくなっています。そういったことを考えあわせると、彦七は自分と「か、」が隠居することを意識し、あえて呼び名を「ば、」に変えていったことが想像されるのです。

江戸時代において「改名」は珍しくなく、成人や結婚、養子入りなどの節目節目に名前を変えるのはもちろん、自分で思い立って変える場合もありました。隠居にあたって名前を変えることもあり、日記にも、苗木小栗作右衛門という人から「老年になったので隠居します。名前も甚作と改号して、気楽になりました」という年始状を受け取ったと書かれています⁽¹⁰⁴⁾。このように自ら改名するのはもちろん、周囲からの呼ばれ方も隠居に伴い変わっていったことが、この「か、」から「ば、」への変化からは見て取れます。

加えて、「ば、」の外泊が圧倒的に増えたのも、家政の切り盛りを譲った安永二・三年頃からです。「ば、は上いづみに泊まったのか、この夜帰らなかった」な⁽¹⁰⁵⁾

(104)

安永四年、正月一七日条。

(105)

安永三年、九月一〇日条。

どと無断外泊がみられるのに加え、安永三年三月に武助夫婦の間に第二子恒吉が生まれてからは、子守に足繁く通い、家に帰って来るのはお風呂だけということも。孫かわいさに加え、第一子万之助がまだ三・四歳だというのも理由だったのでしようが、かつて「かゝ」の外泊を気にかけていた彦七も、必要のない限りは「ばゝ」の自由にさせている印象です。彦七はまだ御山守を務めているので完全に「気楽」とはいきませんが、「ばゝ」は家長の妻として担っていた肩の荷を一足早く下ろし、大いに余生を謳歌すべくかじを切ったのでしょう。

おわりに

明治六年（一八七三）、「太陽暦」とあわせて「定時法」が採用され、一年は三六五日、一日は二四時間に「等分」されることとなりました。それまでの生活を一変させるこの施策は、当初庶民には受け入れ難いものだったといえます。しかし、定刻通りに鉄道が走り、学校教育を通して時間についての啓蒙がはかれるなか、機械時計も普及するに至り、ひとびとの「時間感覚」は大きく変わっていきました。いうまでもなく、現代の私たちの生活は、そうした近代化の延長線上にあります。「分」刻み、場合によっては「秒」刻みで時計の針を追いかける日常。しかしそれが決して「あたりまえ」ではなかったことを、かつての加子母の日常は教えてくれます。

本書では、時刻という細かな単位から、四季折々に過ぎゆく季節、そして人の一生という長い視野に目をうつし、加子母の生活を紐解いてきました。話が雑駁になってしまった部分も多々あると思いますが、当時の生活の情景が少しでも伝わったとすれば、それは日記の筆者彦七のおかげに他なりません。自分の一日の行動でさえ書くのが面倒のように、家族がどんなことをしていたか、誰が来て何を

話したか、しかもそれが何ツ時ごろの話だったのかを毎日丹念に書くさまは、とても尋常ではありません。「そこまで書く必要があつたのか」というほど詳細に書かれた日記から読み取れる当時の何気ない日常は、あらゆる驚きを私たちに与えてくれます。

とはいえ、彦七には彦七なりの「書くか書かないか」の基準があつたようで、日記をどんなに読んでもわからないことは山ほどあります。たとえば、月代を剃つた時期はわかるけれど髭は剃つていたのかとか、朝一番早く起きていたのは誰なのかとか。「か、」は「ば、」と呼ばれるようになりましたが、当の彦七は何と呼ばれていたのでしょうか。対を成すように「と、」(父)と呼ばれ、「じ、」(爺)になつていたのででしょうか。どうやって時間を知つたのかなど、あたりまえ過ぎることも書かれていません。「もう少しここを書いておいてくれれば…」などと思つてしまうこともありますが、さすがの彦七も、子孫でもなんでもない二五〇〜二六〇年後の人間が自分の日記を手に取り、あれこれいおうとは思ひもしなかつたでしょう。

本書でとりあげた事柄は、当時の豊かな生活のほんの一端に過ぎません。今後、さらに加子母の日常が読み解かれることを願うばかりです。

最後になりましたが、史料調査をはじめとして日頃から多大なご協力をいただいている史料所蔵者の内木哲朗氏および内木家の皆さま、講演会やワークショップの

場などで数々の貴重なご意見・ご助言をいただいている加子母地区の皆さま、無理なお願ひにもかかわらず本書のためにいつも素敵な挿絵を描いて下さる加子母在住の絵本作家本間希代子氏に對しまして、心より御礼を申し上げます。

（高木まどか）

参考文献

太田尚宏「『木曾五木』と濃州三ヶ村」徳川林政史研究所編『江戸時代の森林と地域社会』徳川林政史研究所、二〇一八年

太田尚宏『林政史ブックレット 尾張藩の林政と森林文化二 山村の人・家・つきあい―江戸時代の〴〵かしも生活〴〵

①『公益財団法人徳川黎明会徳川林政史研究所、二〇二〇年

加子母村誌編纂委員会編『加子母村誌』一九七二年

河野淳一郎「『公私日記』にみる幕末期名主の妻」『多摩のあゆみ』三七号、一九八四年

庄司吉之助『近世養蚕業発達史』御茶の水書房、一九六四年

瀬川清子『女の民俗誌そのけがれと神秘』東京書籍、一九八〇年

高木まどか・萱田寛也『林政史ブックレット 尾張藩の林政と森林文化七 子どもから大人へ―江戸時代の〴〵かしも生活〴〵

活③『公益財団法人徳川黎明会徳川林政史研究所、二〇二三年

仲泉剛・林幸太郎『林政史ブックレット 尾張藩の林政と森林文化九 人・物・お金にみる山村の暮らし―江戸時代の〴〵かしも生活〴〵

〴〵かしも生活〴〵④『公益財団法人徳川黎明会徳川林政史研究所、二〇二四年

中津川市編『中津川市史』中巻一、一九八八

林由紀子『近世服忌令の研究』清文堂、一九九八年

牧英正『雇用の歴史』弘文社、一九七七年

民俗語彙データベース(国立歴史民俗博物館)

https://www.rekihaku.ac.jp/up.cgi/login.pl?p=param/goi/db_param

日本学士院日本科学史刊行会編『明治前日本蚕業技術史』日本学術振興会、一九六〇年

日本銀行金融研究所貨幣博物館「お金の歴史」

<https://www.imes.boj.or.jp/cm/history/>

和歌森太郎『女の一生（日本の民俗6）』河出書房新社、一九六四年

執筆者紹介

たかぎ
高木まどか

東京都生まれ。成城大学大学院文学研究科博士課程後期学位取得修了。
博士(文学)。徳川林政史研究所非常勤研究員・成城大学非常勤講師ほか。

《主要著書・論文》

『近世の遊廓と客 ―遊女評判記にみる作法と慣習』(吉川弘文館、2021年)

「近世山村における離縁―美濃国恵那郡加子母村内木家『御山方御用并諸事日記』から」(徳川林政史研究所『研究紀要』第55号〔『金鯢叢書』第48輯所収〕、2021年)

『林政史ブックレット 尾張藩の林政と森林文化7 子どもから大人へ―江戸時代の“かしも生活”③―』(共著、徳川林政史研究所、2023年)

『吉原遊廓：遊女と客の人間模様』(新潮新書、2024年)

林政史ブックレット 尾張藩の林政と森林文化11

加子母村の朝・昼・夜―江戸時代の“かしも生活”⑤―

令和7年3月31日発行

編集・発行 公益財団法人徳川黎明会 徳川林政史研究所

〒171-0031 豊島区目白3-8-11

電話 03(3950)0117

印刷・製本 株式会社 思文閣出版 印刷事業部

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話 075(533)6860

ISBN 978-4-88604-052-7



公益財団法人 徳川黎明会
徳川林政史研究所